
嗤う魔性のデュアルフェイス

是音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

嗤う魔性のデュアルフェイス

【コード】

N8410Q

【作者名】

是音

【あらすじ】

「劇的な悲劇が欲しい」

ころりころりと迷い込んだ実が始まりだった。

地図に載らぬ街、並折。

魔都に潜む土着の伝奇。魔都を裁く首輪無き猟犬。魔都に跋扈する異形の数々。魔都を導く死使十三魔。

ある初夏の朝。少女、あまみやざくら天宮柘榴達は、並折の街を訪れようとしていた。

達魔 おはようございます

「ご機嫌如何ですか？ お久しぶりです」

「私達の事、覚えておいでですよ？ 実に八万七千六百時間ぶりですけど！」

「いいえ。確固たる自信を持ちまして、初めまして」

【達魔 おはようございます】

部屋の壁に掛けられた幾つもの蠟燭が暗い部屋を仄かに照らす。それでも床に敷かれた絨毯の模様すらはつきりとしなない明るさで、やはり暗い部屋という表現の域を出ない。

絨毯の中心にはクロスで覆われた正方形の机と、椅子が三つ。他に部屋の内装を説明するなら、それ以外の物が無いといったところか。

「土着の伝奇なんてものは千差万別なの。似通った点はあるかもしれないけれど、その土地その土地の歩んだ歴史に伴って改変ないし脚色付けは施されているでしょうね」

外界の音も届かないようなこの部屋には、三人の女が居た。

一つの椅子に座っているのは、髪が床に着いてしまいそうな程に長く伸ばした、肌の白い成人女性である。その髪は青く、蠟燭の明かりに怪しく照らし出されている。

彼女は、決して喋り慣れているとは思えない小声で話を続けた。

「怪談というものは昔の人の目撃談として記録されるもの。当然ね、奇怪に遭遇した者の証言でなければ嘘の作り話なのは解りきった事子供とて噂話をする時は『友達の友達から』 『知り合いの従兄弟の話では』と、知恵を絞って信憑性を高める前置きを加えるでしょう。ところが 今から話すのは、そういったものが一切無いの。なにせ登場するのは妖怪だけというもの」

純白の、飾りっ気のないドレスが揺れ、彼女は一つ息を吐く。そんな青髪の女性を、期待感溢れる真ん丸な眼で見つめる少女が二人。彼女の正面に座っている。

背丈も顔のつくりも、挙動すら、どこからどんな角度で見ても瓜二つの少女達だった。解り易い程に 双子。しかし立ち居振る舞いを見るに、彼女らが見た目ほど若くないのも明白。更にこの双子は、質素な青髪女性のドレス姿と違い、使用人が着用するようなエプロンドレスを着ていた。しかしながらこの二人は使用人という立場では無いのだから、おかしな話だ。

衣装趣味は多種多様なので置いておき、青髪女性の話に夢中である彼女らは興味津々だった。

「へえ、登場するのは妖怪だけですか」

「それはつまり、信憑性の有無はさほど重要ではない怪談である。という意思の表れでしょうか？ ^{ツガイ} 番様」

最初から作り話として、信用させようともしない事を前提に作られた怪談話とは。珍しいものだ。

青髪の女　　番は、にこりと微笑み、続けた。

「題目は確か……『百奇夜行と、のっぺらぼう』だったかしら」
「のっぺらぼう。私、聞いた事があります。化け狸が顔のない人間を演じて人を驚かしたという」

「違うよ　みそら。正確には貉^{むしな}。狸ではなくアナグマよ。そうですよね、番様？」

番はこくりと頷き、真ん中から二つに分けた長い青髪が揺れる。
「それも正しい。でもね　しずね、日本ではアナグマの事を狸と呼ぶ事も、狸の事をムジナと呼ぶ事もあるの。地域毎にね。では私の話では、ムジナとしましょう」

ね？　と首を傾けて二人を見る。

しずねとみそらは互いに互いの顔を見合い、にっこり頷く。

「なにも『むかしむかし』から始まるわけではないから、どう話しているのか迷うけれど……ちょうど今、みそらが言った通り　のっぺらぼうというのはムジナが化けて顔の無い人間になり、驚かすという話が有名ね。しかしこの話にはムジナは出てこないの。それに初めは　カオナシと呼ばれていた。のっぺらぼうの呼び名が有名になった為に題目も変わったのでしよう」

「なら、本来のタイトルは『百奇夜行と、カオナシ』？」

みそらは丸い瞳をぱちぱちと瞬かせて問う。

「ええ。話の主人公は、そのカオナシ。カオナシ自身の体験談という形なの。カオナシはその名の通り、顔が無い。目も耳も鼻も口も何も無い。何も無い故に、見る事も聞く事も嗅ぐ事も話す事もできない」

これにしずねが小さく笑った。

「体験談も何も、それじゃあどうにもならないですよ」

それには番も可笑しく思い、口元に手を当てて小さく笑った。

「いいところに気が付いたわね、しずね。そうね、有名なのっぺらぼうが話の中で当然のように喋っているのも、妙な話ね」

言われ、そういえば『こんな顔?』と言うお決まりの文句があるのをしずねは思い出した。

「この話が妙に現実味を帯びているのはその点。カオナシは一切喋らない。そう考えると何者かが化けたのではなく、そういう妖怪だったのでしょうか。カオナシは器用な妖怪で、化粧をするのが上手だったらしいわ」

「化粧……」

ほう、と虚空に視線を浮かべたみそらが頬に手を当てる。こう聞けば彼女のように大抵は可愛らしい印象をカオナシに抱いてしまうだろう。そんなみそらを見て、しずねが姉の耳元へ「化粧は元来、魔力を宿らせる儀式として使われたものなのよ姉さん」と囁いていた。

「現代でも女性は魅惑の粧を塗って外出するけれど 貴女達はどうかしら?」

訊かれた双子はどちらも眉を吊り上げて目を大きく開き、「人並みには……」と小さく頷いた。

「ふふ。それで カオナシも自分で自分の顔を描いていたの。ただしカオナシは六つしか部位を描くことができなかつた。だから左右対称にくつついている目と耳と鼻だけを描いた」

左右対称。

その単語を聞いて双子は若干、顔をしかめた。

自分達が並んで立ち、「左右対称だね」なんて言われる事は頻繁にあつたし、自覚もしている。だから別にそういった理由でその単語が苦手というわけではない。

彼女達が、あまり好ましく思わない奴。そいつが、よく「左右対

称なんて嫌いだ」と口にするからだ。左右対称という単語を聞く度にそいつを連想してしまい、彼女達は不快に思うのである。

ともかく、今の話とは関係の無い事なので彼女達も思考からそいつの醜い顔のイメージを追い出し、番の話を聞く至高の時間に集中し直すことにした。

「 どうしてカオナシが化粧をしていたのかというと、やはり外出する為だった。百奇夜行を見に行きたかったのよ」

「人間味のある妖怪ですね」

「なんだかその百奇夜行も祭囃子に囲まれていそうです」

語る番は笑い、先程から机の上に置いてあつた紙とペンへ手を伸ばそうとした。が、ペンが見当たらない。いつの間にか みそらが胸に抱き締めるようにして持っていたのだ。

番は「ありがとう」と礼を言つて受け取つた。

彼女は話を中断し、時折何かを思い出しながら紙に図を描いている。地図だろうか。

大きな丸 。 彼女は「駅よ」と言い、紙の左上の隅に一つ書いた。更に丸の中に『きのえと』という名称を書く。

その右下に、少し小さめな丸。「これも」と言つた。丸の中には『ひのえと』。

またその右下に、同じく丸。『つちのえと』。その右下にもまた丸を書いて『かのえと』。

見事に四つの駅は左上から右下へ一直線に並んでいる。

計四つの駅を描き、最後 紙の右から左へペンを一直線に走らせ、「川が一本」と言いながら『蝉乃川』と書いた。

あとは下方にぐにやぐにやと境界線のようなものを書き、斜線で塗りつぶす。これはおそらく海だろう。上方には山の範囲を書いている。

どうやらこの地図の街は、怪談の伝わる地元の地図のようだ。山と海を含んだ高低差のある広い場所らしい。

番は出来上がった簡単な地図の一番左上 『きのえと』を指しながら「ここからだっただかな」と言い、そこから山や他の駅や川へと、すすいすいペンを走らせた。

成程、夜に行く百奇はそのルートで、列を連ねて歩いたのか。と双子は頷くも、番が口元に手を当てながら「えっと……たぶんこんな感じ」と呟いた為、出鱈目にペンを走らせていた事が判明し二人は拍子抜けしたのだった。

番は最後に、百奇夜行の到達点を指し、妖怪力オナシの結末を述べた。

「力オナシは目と耳と鼻を手に入れ、百奇の仲間に入れてもらおうとした。しかし力オナシには口が無く、自分を名乗ることもできなければ、入れてほしいと訴えることもできなかったの」

力オナシは、ただ百奇夜行を見守るだけだったという。

「山を下り、海へと向かう列。百奇は夢中で行進する。故に、このまま海へ入り溺れてしまうことに誰も気付いていない。気付いたのは力オナシだけだった。しかし口が無いから注意を促す事ができなかった。結局 百奇夜行は海へと入り、みんな溺れ死んでしまった……」

語り終えた番は、疲れたのか胸に手を添えて大きく息を吐いた。間髪入れずにみそらが質問を投げ掛けてくる。

「それが並折という例の街に伝わる怪談ですか。それで、力オナシはその後どこへ行ったのです？」

「わからない。もしも誰かが力オナシに気付いてあげたら、結末は変わっていたかもしれない。そして、今話したこの怪談自体も時代を経て多少なりとも変わってしまったているかもしれない。ちなみに、

この物語を綴ったのがそのカオナシだといふのだからおかしな話ね」

「よ、妖怪が綴った話？」

「文末には『俺、顔、無し』とあったそうよ」

双子はなんだか不気味な心持ちだった。妖怪カオナシ。そいつ自らが文章として残すに及んだ、どうしようもない孤独感とやるせなさに感情移入してしまったからなのだろうか。

そう。この怪談からは、悪意は感じられない。誰もどうしようもなかった為に迎えてしまった悲劇的な結末だ。

再び静けさを取り戻した部屋。

そんな中、しずねが少し迷うような素振りを見せた後、意を決したのか口を開いた。

「番様が、その、つまり ええと」

しかし言葉がなかなか出てこない。

番はしずねの言いたい事を悟ったのか、問われる前に答えていた。「そうね、きつと、作り話じゃないかもしれない。今もまだ カオナシはどこかに居るんじゃないかしら」

しずねは申し訳なさそうに肩をすくめ、みそらは納得したように何度も頷いていた。

「妖怪は決して幻想じゃないわ。事実、貴女達の目の前に居るわけですもの」

番はインクの凍ってしまったペンを人差し指で撫でるように転がす。

「雪女が。ね？」

？

PUNICA【六月の果実】 1

【六月の果実】

乗り換えた始発電車はまだ人が少なかった。

窓の外を眺めると、少し寂しさを覚えるような古びた建物が、錆びた色を帯びて流れている。この寂寥感は　私個人の感覚に因るものだ……と思う。

私は活気のある場所が好きだ。この時間で活気を求めるべきではないのはわかっている。しかし私の視界内を流れるその場所は、きつと、どの時間も、このままなのだろうなと思う。狭い車道を挟むのは雑草の生い茂る歩道や、何年も前に潰れてしまったガソリンスタンド、看板の剥がれたビル。私はこんな場所を歩きたくは無い。たとえ古くとも、人の気配が欲しい。この電車に乗り換えた駅が活気溢れる場所だっただけに、この景色は一層私を寂しく思わせる。

まあ、この電車という箱に包まれている以上、それは他人事のような感想である。あの場所はこの先何年もあのままだろう。でも、私には　関係ない。

窓から目を逸らし、腰を更に前へずらす。我ながら、なんともだらしない姿勢だ。

それにしても　煩い夜行列車だった。どうやら私が乗ったのはモーターを積んだ車両であるらしく、夜行列車だというのに一向に眠れなかった。更には車両一番前の座席で、トイレへと立つ乗客が何度も往復しやがる。

車両の扉を開けたり閉めたり開けたり閉めたりドツタンバツタンドツタンバツタン！　もつと静かに動かせや夜行って事は寝たい人

も居るんだぞ、いやむしろ睡眠中の乗客が多数居る事が当然だろう、自然だろう、大前提、常識、想定範囲内ですよ。それをどいつもこいつも無遠慮にドツタンバツタンドツタンバツタン。

百回死んで九十九回だけ生き返ってる　と、今更愚痴をこぼしたって意味は無い。あの指定席券を買った私の運が悪かったのだ。とにかく窮屈な座席に縛り付けられて一睡もできないまま関東から六時間。六時間！　よく耐えたものだ。

そして苦痛の夜行列車を降りて乗り換えた電車は、素晴らしい乗り心地だった。余裕のある空間というのは大切だと改めて思った。二人掛けの座席。背もたれは大きく稼働し、二人ずつ向かい合わせる事もできる。乗客は少なかったので私は贅沢にも四人分のスペースを独り占めにし、はしたなくも足を大きく伸ばしていた。

これが、つい二十分前までの貴重なリラックスタイム。

そんな時間をぶち壊し、私の気分が滅入ってしまう原因となったのは、目の前で声高に得意げに満足げに舌を回す　この女だ。

「便利なのは結構。だが勘違いするなよ、この電車も、車も、貴様達弱肉が普段から至極当然のように使用しているありとあらゆる物は、それを最初に作り出した能有る者のおかげであるという事だ。在って当然と思うなよ。人間はな、その自覚すら無いカスが増えすぎた。有能が作った環境で、無能が生かして貰っている。だから人間は増えすぎた！　臆病な、自然界の害が、群れて群れて有能に隠れて生きている！　老衰だあ？　老衰を許されるのは有能のみ！　そう思うだろう弱肉？」

「うるさいから黙れ」

彼女の紹介も、端を折ってしまえばこの一言に尽きる。

うるさいから永劫黙っていて欲しい女、だ。

出会って二十分で、私にここまで嫌悪される存在ということだ。

始発に乗ったとはいえ、しばらく駅を経由すれば乗客も増えてくる。まだまだ満席とはいかないが、端であるこの一号車両も通勤、通学とみられる利用者が乗っていた。私も席を独占することなく姿勢を整えた。隣には若いサラリーマンらしき男性も座った。

そこへ 二号車両の方から移ってきた女が、こいつだった。

女は長い黒髪を揺らし、軽快なステップで歩いて来たと思いきや車両の中間で立ち止まり、周囲を見回す。その眼は獲物を求めるように研ぎ澄まされていた。ただ席を探すだけだというのに。

そうして不幸にも 私の正面に座ったのだ。

向かい合わせにしていたのが失敗だった。いつも私は、後悔と共に生きている。後悔先に立たず。当然だ、向かい合わせの座席を直さなかったから後々面倒な事になるなんて、誰が予想できる。

正面に座った女が、直後首の関節を鳴らしながら、車両中に聞こえるような大ききで「弱肉だらけで涎が出るね！ 餌は餌らしく隠れてやがれ！」と叫ぶなんて、誰が予想できる。

隣に座ったサラリーマンも萎縮してしまい、顔を伏せている。朝から気分を害する乗客に鉢合ってしまった、さぞ不愉快だろう。

私は、彼の膝の上に堂々と組んだ片足を乗せる女を舐めるように睨んだ。編上げのブーツの底が彼の太ももに食い込んでいる。嫉妬してしまいそうな脚線美を際立たせるカプリパンツ。ゴムのような質感をした黒いタンクトップの上に、ジャケットを羽織っている。そのボディラインを前にして目のやり場に困っているのも、彼が顔を伏せている理由だろう。そもそもこの女、二人分の座席を当然のように陣取っていやがる。

「おはよう弱肉系男子」

濃厚且つ醜悪な汚泥を爽やかさと美貌で包み込んだような笑顔。新商品『悪女まん』と名付けよう。その笑顔で女はサラリーマンにウィンクした。

彼の膝に乗せたブーツが、撫でるようにもう片方の膝へ移動する。若いサラリーマンは困ったように下を向いたまま会釈するだけだ。

そんな時　彼の携帯電話が鳴った。

私は持っていないが、電車の中では電源を切っておくのが常識だ。彼は慌てて携帯電話を取り出し、電源を切ろうとした　のだが。液晶画面を見た彼の顔が青くなる。

どうやら、電話を掛けてきた相手が、まずかつたらしい。

サラリーマンは私と女に「す、すみません！」と小声で謝りながら、肩をすくめて携帯電話を耳に当てた。

そんな様子を女は特に興味もなさそうに眺めている　と思いきや、何かしでかすつもりなのか腰を上げやがった。

「はい、もしもし」

「ゆうーだあーくうーん！」

私にも伝わるほどの大音量が端末の向こうから聞こえた。

「なに、君、今どこに居るのー？」

「えと……電車の中です。企画の関係で遅れてしまいましたが」

「ああ、ドミノ倒しのやつ？」

「はい。言われた通り企画の修正もしました」

「うんうん。あつ、じゃあ娘も一緒？」

「そ、それが、その……先程まで僕の傍に居たのですが、駅では、はぐれてしまっ」

「はああああ？」

「えっと、はぐれたというかちょっとした喧嘩を。ちゃんと同じ電車に乗っていますので」

「あ、そう。ああ驚いた」

そういえばこのサラリーマンは機材のような荷物を足元に置いている。どこかへ取材に行く途中なのだろうか。

と思っっている間に、肉食系女は身を乗り出し、電話中の彼に顔を近づけていた。ただの変質者だ。サラリーマンも仕事の話中だろうから女には何の興味も示さず、ただ鬱陶しがって喋りながら席を立つ。

「はい、はい。大丈夫です。到着したらまた連絡入れますけどえ？ はい、並折です」

直後 私は身体を硬直させていた。楽しそうに男へちよっかいをかけていた女も、表情を強張らせてびたりと身を凍らせている。しかしサラリーマンはそんな私達を気にするわけでもなく、二号車の方へ行ってしまった。追うべきか？ 追うべきかもしれない。並折という街へ向かおうというのなら、彼は止めるべきだ。

「やめときな、弱肉娘」

制したのは目の前の女。彼女はサラリーマンの座っていた場所つまり私の隣に上げた腰を下ろした。

この女もだ。並折と聞いて反応した。

「あの男は本当に弱肉だ。喰われて終わりね」

そう言いながら二本の指で挟んだ紙を一枚、私に見せてきた。

『湯田 直哉』

サラリーマンの持っていた名刺だ。手癖の悪い女め。会社もどこかの映像スタジオなのだろう、名刺のデザインが凝っている。

彼はきつと、命を落とす。並折という街は一般人が興味本位で立ち入って良い場所じゃない。きつと、

「ふん。表側の都市を取材するつもりが、手違いで並折を知ってし

まった。ってところかね」

女は私と同じ考えを口にしていた。

並折は知られざる街だ。この国の地図を隅から隅まで探したとしても、見つける事は出来ない。並折は裏の都市。表の、地図に載っている都市と重なった場所。だから並折という呼び方はされても住所は別の土地名が用いられる。隠語のようなものだろうか。

故に並折の住人は、普通ではない。普通ではない世界に生きる者であり、並折は普通ではない場所だ。

「貴様もこつち側だったのね、弱肉」

「……貴様とか弱肉とか、随分と見下すわね」

「当然さ！ 私様よりも劣った奴らを私様が見下すのは自然じゃないか！ それなのに貴様のようにああたこうだと文句を垂れるから人間は自然にとって害なんだよ。お、わ、か、か、り？」

「そう思うのは貴女の勝手。あたしにも天宮柘榴あまみやばくろうという名前がある。口に出すなら弱肉とかじゃなく名前と呼んで頂戴」

ふうん、と。彼女は片目を閉じて私を観察する。

それから 片手を差し出してきた。

「私様の名前は、守野三桜もりのみおづ。いやあ私様も実は並折を訪れるのは初めてでね。もつと言えば、日本へ帰ってきたのも久しぶりなんだ。

弱肉……じゃなくて柘榴、貴様も訳ありで並折へ向かっているんだろ？ 訳が無ければ行ってはいけないからね、あそこは」

「詮索は嫌いだ」

「おっとそうかい、お互い気が合いそうだね。弱……じゃくろ」
「略すな」

差し出された手を私は甲で弾き、さつきから私の足を踏みつけているブーツを蹴った。

守野三桜。並折へ向かうには 一人より二人が安全だろう。好

きにはなれないが。まあ構わない、どうせ並折へ向かう者なんて、後ろ暗い連中ばかりだ。三桜にも何か理由があるに違いないけれど、それは私も同じ。馴れ合って我が身が守れるのなら、いくらでも馴れ合うさ。

聞けば、三桜も関東からやって来たのだと言う。だが彼女は私と違い、あの窮屈で退屈で拷問じみた苦痛を味わうことなく、新幹線に乗り、一時間でこの中部圏へ来たそう。実に羨ましい。

そして　少し引つかかったのは、彼女の苗字だ。

守野……。

なにもそう珍しい苗字ではない。けれど、気にならざるを得ない事情が、この国には存在する。

純血一族　　そう呼ばれる日本の裏組織。

裏組織は世界中に大なり小なり存在するが、その世界中が危険だと口を揃え、世界中が関わりを避けたがる。それが純血一族だ。

この組織は、全部で十三の家系から成っており、その全容を知る者は少ない。私のような者が知っているのはせいぜい二、三家系。だからこそ、その知っている家系の中に守野家という単語が含まれているからこそ、気になった。

連中の何がそれ程に危険なのか。それは、その名の通り、純血だからである。とはいえ当然、ただの純血ではない。連中は、遙か昔から自分の血を呪わせているのだ。呪われているのではない。呪わせている。そして呪詛は人では到底持ち得ない力を、与えるのだ。血が濃ければ濃い程に、呪詛は見返りを与えてくれる。故に　純血一族十三家系は、身内で種を増やし続けているのだという。

摩訶不思議な話だが、連中の超常たる力の前に消滅した機関は数知れないのも事実。

呪詛　　というものを操る術を手に入れ、試行錯誤の末に『人を超えし人』を生み出すに至ったという狂気。そしてそんな事を考え付いた家系が、十三もあつたという恐怖。挙句、現代に於いて……その十三家系が統一され、一つの殺人集団として猛威を振るつていくという惨劇。

純血一族が、世界危険勢力の一角と目されているのも当然だ。

そう。私が気になり、同時に表に出さずとも恐怖すら抱いているのは、今、肩が触れんばかりの至近距離で、欠伸なんかをしているその女が　純血一族守野家の人間なのではないかという件なのだ。考え始めると一層勢いが増してしまう。三桜の言動　他人を見下し、まるで己が人を超えているとでも言うような態度。振る舞い。言うようなではない……彼女は他者を弱肉と言いつ捨てている。この電車内でも、わざわざ人の少ない一号車を選び、移動し、気を張って座席を探し、人を寄せ付けない言動を吐き散らしたのは、純血一族特有の殺人衝動に因るのではないか？　殺人衝動を抑えるために、わざと人を寄せ付けないようにしているのだとしたら。

とどめは守野三桜が、純血一族でもなかなか正確な所在を掴めない魔都　並折へ向かっているという事実。魔都を知るのは裏で生きる者。純血一族でない者が、純血一族と同じ名字で生きていられるわけがない。

私は心の中で深い溜息を吐いた。

確定だ。辻褃が合い過ぎる。

守野三桜は、純血一族の人間だ。

「そろそろ着くんじゃない？」

三桜の声で我に返り、車内の電光掲示板へ目を送った。確かに、名前は違うが並折の駅は次だった。いつの間にか幾つもの駅を経由していたらしい。

「あれ？ でも三桜、さっきの駅を出てから車内アナウンスって流れた？」

問い掛けると三桜は視線を斜め上に向けて首を傾げる。

「そついえば……聞いてないかも。忘れてんじゃないの」「うーん」

どうにも落ち着かない私は席を立ち、隣に座る三桜の頭越しに車両内を見回してみた。

最前の一号車両。運転士の後ろ姿を眺める。特に変わった様子はない。外の景色も、変わりなく流れている。

今度は反対側 二号車両へと繋がる扉の方へ顔を向けた。窓越しに見える二号車も、乗客の様子に変わりはない。

そわそわしすぎかな。やっぱり気のせい 「ん？」

「どうした柘榴？」

三桜の声を無視して目を細める。

二号車の乗客が突然、一斉に頭を上げた。

ほぼ全員が、私に後頭部を向けている。

と、次の瞬間 三号車両とを繋ぐ扉が乱暴に開かれた。

男性か？ 学生服姿の少年が何か大声で叫んでいる。

彼は二号車の乗客には目もくれず、今度はこちらへ駆けてくる。目を細めて見ていた私でも、彼の表情がだんだんとわかってきた。

泣いている。汗だくだ。恐怖を顔に張り付けている。

ついに学生は一号車両へと飛び込んでくる。その荒々しい扉の開け方に、やはり一号車の乗客も一斉にそちらを振り返った。彼は息も絶え絶えに何かを伝えようとしている。

「一番後ろ……車両……」

彼は、運転士を含む一号車両全員に聞こえるよう、大声で叫んだ。

「最後尾の乗客がみんな死んでる！」

PUNICA【六月の果実】 2

『人間が生きている』

これは三桜の言葉だ。

最後尾車両で乗客が全員死んでいる、という男子学生の咆哮で一
号車両は静まり返り、直後　その後ろから二人三人と続いてやっ
て来た者達は同じ言葉を口にした。

後部車両から駆けてきた数人は勿論、赤の他人である。一時は静
寂に包まれた一号車両も、混乱の声が次々に上がり始めた。

黙ってその様子を眺めていた私が三桜の様子を窺った時　彼女
は懸命に窓の外へ視線を向け、生唾を何度も飲み込んでいた。
酔ったのか？　だらしのないなあ肉食系女が。

そう冷やかそうと彼女の肩に手を乗せる　　って痛、痛い。

待って、痛い痛い。なに、え？

ちよつと三桜、なにしてんの痛い痛いつてば。

腕に爪が食い込んでる。そんなに長い爪付けてたっけ？

え？　え？

三桜？　おい、肉食系って本当にそういう意味じゃないよ？

「み、三桜！　なんであたしの腕、かじるの？　痛いつて！」

三桜はびくんと痙攣した後に我に返り、吸った上に口腔内で弄ん
でいた私の中指を解放した。

頭おかしいんじゃないのこの女。

涎に塗れた中指を自分のスカートで拭くと、齒でも立てやがったのか血が滲んでいた。

彼女は完全に引いてしまっている私の存在など気にも留めず、片手を顔に当てて汗を拭う。そして耐えきれずに言ったのだ。

「人間が生きている……」

頭おかしいんじゃないのこの女。と思ったら案の定頭おかしかったですよ。

顔が高揚して興奮状態だぞ。変態ここに極まれり、だ。

と　こいつが最初から普通の女だと知っていれば、最後までただの変態妖怪『指舐め女』で済んだのだが。

守野三桜は血に呪詛を宿した変態一族の末裔なのだ。ただ指を舐めるだけの変態ならまだ可愛いものさ。こいつが私の腕を引つ掴んで指を口に含んだのは、指を舐めたいという欲求に因るものなんかじゃあない。

人を殺したいという欲求に因るものだ。

下手をしたら私は指を噛み切られていたかもしれない。

一層頬をひくつかせて一步下がる私に向かって、三桜は変態音声を発せ再生し始めた。

「心ならずも決まった時間に起床し、機械的に食事を摂り、何気なく、誰もが恒久的に、うんざりだとすら思いながら過ごすだろこの時間。現代に於いては、うんざりだと思ふ事すら放棄してしまう奴も多いこの時間。どいつもこいつも生きちゃいない。私様の目には、くっそ不味そうなジャンクフードに見えた。ところがどうだい、この光景……」

空っぽの人形に魂が宿り、人間として生きているじゃないか。

そう言いながら三桜は異様に長い舌で唇を舐めたのだった。

次の駅で電車は停車し、乗客は全て降ろされた。

私と三桜はこの駅で下車するつもりだったのでそのまま改札の出口へ向かえば良いのだが、電車を降りた私達の目の前ではパニックを起こした乗客がそこらじゅうで喚き、駅員は縦横無尽に走り回り、野次馬は集まってくるばかり。

全八両編成の電車の最後尾で事件が起きたのだ。

事件・事故が一つ起きると、その情報は日本中へと配信される。これだけの死者が出たのなら確実だ。

しかし並折がそれを許さない。

幸い、乗客の大半は此処で事件を知り、見てしまった者は此処で死体を見てしまった。

並折という結界の中で。

並折は別に異次元のファンタジックワールドではない。並折という結界を知る者だけが並折の結界を活用し、何も知らぬ一般人と日常を共にする街。

何も知らない此処の一般人達は、たとえ目の前で人が殺されようと、たとえ抱き締め合う途中で相手の首が吹き飛ばうと、それを異常と捉える事はできないのだ。何の感想も抱かず死体を踏み付けて歩行を継続し、何の反応も示さず恋人の死体を置いて着替えに帰る。まるで街に意思があるようじゃないか。

ああ、これは外界に漏れてはいけない。という現象は、日常から隔離してしまう。

並折は、そんな街なんだ。

だから、今この場で悲鳴を上げている連中も、事件だと動き出した警察機関も、少し経てば八号車両で何が起きたのかなんて忘れてしまう。興味も失せてしまう。

犠牲者達はどうなるのか。遺族は心配しないのか。しない。

街はまるで運命の糸を握っているように全てを手繰り、全てを無理矢理に無へと改竄する。

この街の恐ろしいところは、そこだ。

この街で死んでしまうと、並折の住人の記憶以外から、存在は抹消されてしまうのだ。

だから八号車両で死んだという者達は　もう外界では存在すら消されてしまった事になる。親族は無意識に遺物を捨て、部屋を片付け、住民票を始めとする個人情報、弄る事のできる立場の人間が灰にしてくれる。無意識に積極的に一個人を消しに動いてくれる。まるで神様。

一生物のトラウマを刻み込まれた目撃者の悲鳴も、私はさほど気にしていない。すぐに解放されるのだから。

電車は八号車両だけを切り離し、『現在　分遅れで云々』と通知しながら平常運転に戻る。

溢れ返らんばかりの恐怖や、混沌と入り乱れる感情は、魔法のようにサッパリスッパリ彼らから消え去るのだ。

八号車両まで様子を見に行った私と三桜は、その凄惨な光景に言

葉を失った。

車両の窓が 血で染まっている。

助けを求めた被害者の手形がいくつも残っており、ガラスに付着した体液は様々な色。停車直後に見に行ったのでまだ場を取り仕切る係員も集まっておらず、私達は車内の様子も見る事が出来た。

入口の前で立ち止まり、顔をしかめる私を置いて、三桜は中の様子を見に行ってしまう。

現場は最悪。吊り革から手首がぶら下がり、床には飛び散った骨や歯が肉を付けたまま転がり、肋骨を剥き出して内臓を吐き出す胴体が座席の上で横になっていた。

生々しい。まだ瑞々しさを保った塊が、まるで河原の石のごろごろと。これ何人分あるの……？

三桜が摘まみ上げて観察しているのは 下顎だ。顔の上半分が無く、下へ引き千切ったような痕跡があった。首の皮が一緒に剥がれている。

原形を留めている死体は一つもなかった。

老若男女区別なく、この車両に乗っていた全員がジャムにされている。ああ嫌な想像した。しばらく朝食にパンは控えよう。

「こいつの歯、見てみる」

三桜が見せてきた下顎。何を見ろと言うのか。

「奥歯が割れている。歯を食い縛った為に割れたんだ」

「なに……どういうこと？」

三桜は私の問いを無視して幾つかの胴体を蹴って転がす。

サッカーボールのような扱いで集められた胴体はどれも頭部や四肢を失い、柔らかくも長い腸が巻き付いていた。彼女はそれらの首元を引つ掴み、滑りを帯びた断面に指を突っ込んだり広げたりしている。

「うむ……やっぱり上手に取り除かれています」

こんな場所で鑑定士を気取るのはよせ。

「何が」

「声帯」

あっさりと言った三桜は近くの座席の、かろうじて汚れていないシートで手を拭う。その表情は、体液に手を汚した不快感など微塵も抱いていない、嬉々としたものだった。

「やってくれるね。ここまでやられちゃうと悔しくなっちゃうね」

「だから、どういう事なのよ。こんな、形を失った肉片を楽しそうに調べて　一体何がわかるっていうの？」

若干の苛立ちを含めて、もう一度問う。

今度は三桜も答えてくれた。

「この犠牲者達、手足もがれてもまだ生きてたって事だよ。あの死体も、この死体も、腹を裂かれて皮も爪も剥がされて骨を磨り潰されてる間も　意識はあつたんじゃない？」

なにそれ……この人達、すぐに死ねなかったの？

声帯が取り除かれていたという事は……悲鳴を上げられないようにしたという事？

奥歯が擦り減り、割れていたのは、苦痛に悶え、耐えようとしたから？

それって、もう　拷問じゃないの。無差別拷問殺人なんて、質が悪すぎる。最悪よ。

「これだけの所業を、短時間でやってのける事が可能な奴なんて居ない。少なくともこれをやった奴は、痛みに苦しむ様を愉しむ類だ。短時間じゃあ意味が無い筈。それにこれだけの弱肉ミンチを、どんな機械を持ち込んで作り上げるってんだ」

どの肉片も、鋭利な刃物で切られたような断面じゃない。むしろ凹凸のある器具で擦切られたり、捻じ切られたり、千切られたりしたような痕跡ばかりだ。皮を剥がされ、大きな針孔を空けられたモ

ノまである。

男女の区別なく、上半身から 下半身まで、徹底的に弄繰り回されたのだろう。こんな死体、私でさえも目を背けたくなる。楽しそうな三桜だつて頬を引き攣らせているくらいだ。

残虐非道を極めた地獄絵図が、この車両の中に描かれていた。

なのに……。

なのに……どこにも、そんなあらゆる鬼畜行為に用いられた器具が見当たらない。一つもだ。

「三桜……あたしにはよくわからない……」

「だ、か、らあ」

三桜の口が、耳まで裂ける。比喻ではなく、本当に。

みしみしと骨格が音を立て、女性なのに筋肉が隆起した。

それは一瞬。次の瞬間には元に戻っていた。

しかし彼女の身体は一瞬だけとはいえ、確かに私の目の前で 人ではなくなつた のだ。

「私様達のような、超常の力によって行われた殺戮つて事」

「貴女達……純血一族のような？」

「そ。なんだ私様達の事、知ってんじゃん」

私の予想は正しかった。やはり彼女は世界危険勢力の人間だつたのだ。

「ここで、よくある弱肉の話としては、優秀な頭脳を持った奴がズバツとこの謎を解決しにやってくるのだろうけど、まあ無理だろうね」

「超常の起こした事件だから？」

「イエスイエース。この事件は弱肉のトリックでもなんでもない。

前の駅で車掌のアナウンスはまだ流れていたから、これは駅と駅の

間を電車が走る十数分程度の時間で行われた。つまり 十数分で車両内の乗客全員を解体して苦痛に苦しむ様を存分に愉しんだ後にミンチにできる奴 が、やった事。そういう事。そんだけの事。七号車の乗客に気付かれる頃には全部終わってたなら、なかなか手馴れてるね」

超常……？ これの何が超常だ。下顎を投げ捨てる三桜といい、この現場を作った者といい たとえ人を超えた力を使用する者であるうと、これは、この状況は、異常だろう！ そうだ、異常なんだ！ 超常とか強者とかそんなものはどうだっていい。それ以前にこれは、

「異常だ！」
思わず叫んでしまった。そんな私へ三桜は 侮蔑のような感情を含んだ、静かな視線を送るだけだった。

それどころか。私の反応を楽しむかのように、視神経を伴って転がる眼球を、ブーツの底で一つ一つ踏み潰している。

周囲を潰し終えると 今度は飛散した脳漿の上に足を置き、くちやくちやと音を立ててリズムを刻む。

なんだ……なんなんだ、こいつ。
「解っていないねえ、柘榴」

彼女はルージユのひかれた潤いのある唇を少しすぼめて ちゅ、と私へ向けて音を出した。虚仮にされていると理解した。

嘗めるな。私だつて死体は見慣れている。そういう世界で生きてきたのだ。それでも、私はお前を お前のようなモノを嫌悪する。それでも私の反応は間違っている。きっと、そうなのだ。

この場に於いては。

「そう。勘違いしちゃあいけないぜ。此処はもう、並折なんだ。並折の 『きのえと駅』さ。並折は貴様の思っている通り特殊極まる結界都市だよ、まさしくもれなくその通り。でもこの街へ来たな

ら、それは別段重要じゃあない。貴様、解ってる？ 本当に本当に解ってる？」

びき、びき と、三桜の首元からこめかみへ大きな筋が浮き上がる。

「この化け物じみた結界都市へ訪れる者の中に、貴様のような一般人思考の奴なんて居やしないってんだよ！ 『いやーん死体こわーい』 『やだーこんな事する人が居るなんて、信じられない』なんて抜かすパーフェクト間抜け自殺志願脳内お花畑は尻尾巻いて帰れって事だよバアカ！ 解ったか柘榴！」

誰がパーフェクト間抜け自殺志願脳内お花畑だ、こら。

私は眉間に皺を寄せて三桜の襟首を引っ掴んだ。

「ようは、これも通常で平常で日常って事でしょう！ 並折では！ でもあたしは異常だと言い張るね！ お前らのような変態雑食厚顔無恥のファツキンビッチ共なんかと一緒にあって『あら今日も死体が落ちておりますわねホホホ』 『私の殺害記録は云十人ですよホホホ』なんて会話に参加してやるものか！ 一般的思考？ 大いに結構よ！ あたしはこの思考で此処に居座ってやる！ そしてお前は通常と異常の区別が次第につかなくなっていくのさ！ 思わぬタイミングであたしに『異常』と言われて感覚の変化に畏れるといいのよ！ 『いやこれは貴様の感覚でも普通だと思っただ』なんて間抜け面を晒しながらね！ お前こそ解ったか三桜！」

一気に肺から息を吐き出して声を乗せた為、大きく肩が動く。こんなに叫んだのは久しぶりだ、畜生。

「やはり貴様は馬鹿だ」

三桜の喉から音が鳴る。まるで彼女の気管に入った球が震えるような、獣のそれと変わらない唸り声だった。

「並折は隔離された街だ。日常からも、外界からも。言ってしまうば　この街自体が一つの世界だ。たとえ貴様が外界の正常を掲げ、此処で叫び、並折を非難したところで、意味は無い。確かにこの殺戮を並折以外の街で行えば、貴様の言う異常は異常として誰もが認識するだろう。何故ならばそこに生きる者の大多数が殺人とは縁が無いからな。日常では有り得ない光景として認識されている。しかし貴様は別だろう、殺戮も行われかねない日常で生きてきたから、この並折を知って此処まで来た」

襟首を掴まれていた三桜は私の手を弾き、一度両目を閉じた。

次に片目だけ開き　私の額へ指を突きつける。

「貴様は一般人じゃあない」

冷ややかで、嘲笑を含んだ声だった。

「自分は私様達とは違う、だなんて思っていないか？　貴様が生きてきた環境も見てきた光景も描くべき未来も訪れるべき最期も、一般人とは違うんだよ。並折に足を踏み入れる者は総じてもれなく余すところなく、そういう奴なんだよ。だからこの街は、そういう奴しか生きられない。そういう奴しか居ない筈なんだよ。もしも生き長らえたいのなら、パーフェクト間抜け自殺志願脳内お花畑　ではなく、貴様の言う変態雑食厚顔無恥のファツキンビッチであるべきだ。というか、貴様が歩んできた人生は既に変態雑食厚顔無恥のファツキンビッチそのもので、貴様は明らかに変態雑食厚顔無恥のファツキンビッチのくせに『私は違う』と声を荒げている。教会に並んだシスターの一人が突然般若心経を唱えだすくらいの違和感さ」

「お前が言うな。車両に現れた時のお前の姿はハレルヤと叫ぶ坊さんと変わらない違和感を纏っていたぞ。あたしは、お前の言うように殺人が日常に居座る世界で生きてきた。でも、それが当然だなん

て思った事はない」

「……此処を知り此処へ来る立場の人間が、皆同じ感性を持っているとは私様も思っていないさ。私様は忠告をしているだけだ。貴様が弱肉と同じような反応を示し、弱肉の感性に従って行動するんじゃないかとね」

「余計な心配だ。こう見えてお前の思っているほど生温い世界で生きてきたわけじゃない」

「私様と行動を共にするなら面倒は掛けるなど言いたいんだよ。こちらら生肉ぶら下げてサバンナを歩くような真似はしたくねえのよ」

解ってる。そんな事、解ってる。

三桜だって初めて訪れたというのに、彼女は片手を胸に当て、もう片手を背に回し、私へ顔を上げたまま会釈して言った。

「ようこそ、クレイジーな街 並折へ」

私は気付くのが遅れたが、惨劇の八号車両を観察しに来ていたのはどうやら私達だけではなかった。一人の男性と、二人の女性。その三人組もまた、私達とは別の乗車口から中を観察していたのだ。たった今、三桜が言ったように、此処はもう並折なのだ。駅のホームで吐瀉物を撒き散らす人達とは、住む世界が異なる。あの三人組もまた、並折の住人なのだろう。

そこまで考えないと動かない私は 実に愚かだった。

さほど多くない荷物。その中の、私にとって最も大切な物の存在を、ここに到ってやっと思い出したのだから。

三桜のような超常の力を持っていない私が、単身この並折へ来られたのは、その物の存在があるからに他ならない。自分の身を守る武器だ。

それは小さな折り畳みナイフにすぎない。しかし、勿論、ただのナイフではない。これがあれば大抵の危機は乗り越えられる代物だ。危険地帯に足を踏み入れた今。その存在こそが、私の命綱である。肌身離さず持つておくべきだ。手さげのバッグなどではなく、上着のポケットに移動させておくべきだ。

そう慌ててバッグの中に手を通す込んだ私は、直後 脳に直接、液体窒素を吹き付けられたように、思考が硬直した。

同時に視界も真っ白になる。

「ない……」

私の命綱が、消えていた。

三桜が誰かと話している……。

ああ、さっき見た三人組だ。その中の男性と話しているのか。

男性は 学生か？ 若い。もしかしたら成人しているかもしれない。深く被ったニット帽からはみ出た黒い髪が覗いている。

「ほほう、貴女達はこの電車に乗っていたんですか」

「まあね。とはいえコレをやった奴は見えないどころか、到着して初めてこの有様を見せつけられたのよ。貴様、その様子だと並折の住人だな？ 弱肉」

「弱肉つて……ええ、並折の住人です。もつと細かく言えば、境界寮の住人です」

ここで三桜の眉がピクリと動いたのを私は確認した。

青年の後ろでは、残りの女性二人がなにやら話し合っているのが見える。その女性の片方を見て 私はぎよつとした。

女性にしては背が高く、細身のスーツに包まれている。髪は短め、あれはシャギーボブというのだろうか。前髪は斜め左分け。ここまですで特に変わった点はない。だが問題は顔だ。いや、綺麗な人ではある。目つきは鋭く男勝りな印象を受けるが、十分美人と言えようともすれば……彼女の化粧が問題だった。

両目の周囲に青いアイシャドウを塗っているのだ。その範囲が広くて私は驚いた。瞼の陰影を際立たせる効果や顔の立体的印象を与える効果など無視したように。それはもう化粧というよりフェイスペイントと言っても過言ではないように。

パンダ と、そう表現しようと思いましたが、何故かパンダのよう

には見えない。自分でも訳が分からないが、とにかく彼女に似合っ
てしまっているのだ。奇抜な化粧でも似合う彼女の顔立ちを、畜生、
羨ましく思った。私は女なので確信は持てないけれど、なんかこう、
こういう女性に蔑むように見下されて喜ぶ者も居そうだ。私は何を
考えているのか。

えー、対象は変わりましてもう一人の女性。

こちらは派手な化粧など施しておらず、質素な美しさがあった。
アイシャドウの女性とは全く異なる。

長い髪を三つ編みで一つに纏め、クラシクなロングワンピース
を纏っている。そして……その上に家庭用のエプロンを掛けていた。
表情は穏やかで、若干垂れ目気味だ。相方と話してはころころと可
愛らしい笑顔を零している。なんだか母性溢れる印象を受けた。

待て。人間観察をしている場合じゃない。

つい観察させられる容姿を目の当たりにした所為で、思考を持っ
ていかれた。

私は誰にも悟られぬよう、もう一度、自分のバッグの中へ手を入
れる。どこを撫でてもあるべき感触が無い。小さな折り畳みナイフ
といえど、さすがにこれだけ手探れば 結論を出す段階だ。いつ
までも中を探してたつて見つかりっこないんだ。

武器を無くした。

車両の中に置き忘れたのか？ と思ったが、私は席を立つ際は自
分の座っていた場所を確認する癖が付いている。それはないだろう。
うっかり落としたか？ それこそ有り得ない。私の武器 鎖黒^{トザクロ}
は貴重な物だ。バッグの中に備わっている内ポケットの中に入れて
いたから、落ちる事はまずない。

電車に乗り、一息ついた際に鎖黒があるのを一度確認している。

さつさと結論を出すべきだな。ようは……盗まれたんだ。御丁寧に内ポケットのボタンが外されているのだから、最初からそう思ったさ……。

ならば盗んだのは行動を共にした三桜 ではない。サラリーマン含む私の近くに座っていた奴らには警戒していたので、バッグに手を伸ばせた奴は居ない。

盗まれたのは一号車両を降りてからに違いない。

最後尾で事件が起きたという情報に意識が集中してしまい、そこから私の周囲に対する注意力は散漫になっていた。何故なら殺気や怪しげな気配を身に纏っているのはむしろ私や三桜の方だったのだから。ホームに溢れかえる乗客達を避け、八号車の光景を目にした時などバッグを抱えている感覚すら失せていたと思う。三桜が私の目の前で肉塊を弄っていた時もだ。あのタイミングなら十分、私のバッグの中に手を突っ込んで漁る事が可能だ。我ながら間抜けで恥ずかしい話だが、自信を持って言える。

ぐうぐう、犯人を捜そうにも……容疑者はホーム内の奴ら全員。それならまだ良い。あれから時間が経ってしまった。つまり頭が正常な奴なら、とつくに逃げてしまっているということだ！

鎖黒が無ければ私は無力だ。

三桜に言わせれば、ただの弱肉だ。いや、三桜は今もそう思っているだろうけど。

本当の弱肉になってしまった私は、もう並折に居る。危険だ。引き返すか？

冗談じゃない！

なんとか鎖黒を取り戻さないと。手掛かりなんて無いけれど。それまでは 極力、目立たないように立ち回ろう。うん、それは最初からそのつもりだったけど。

密かに胸の内で悲鳴を上げる私の元へ、三桜が戻ってきた。

「おい柘榴」

「弱肉で良いわよ……」

「はあ？」

気味の悪いものでも見るように眉をひそめた三桜は続ける。

「あの連中、結界寮だ」

「なにそれ」

「き、貴様は、そんな事も知らずに此処へ来たのか」

悪かったね。私は純血一族という大きな組織に属す三桜とは違う。

三桜は簡単に結界寮と呼ばれる連中について教えてくれた。

「結界寮つてのは数年前から並折にできた、文字通りの寮だよ。そこらへんの宿と一緒に。そこらへんの宿と違うのは、その性質。結界寮は、表で言うところの警察みたいなもんだな」

「警察？ ああ、普通の警察機関じゃ並折は仕切れないもんね」

「そう。異常超常、裏稼業、そんな連中の集まる並折は放っておけば無法地帯だ。だから結界寮が並折の監視、管理を始めた。とはいえ警察とじゃ全く仕組みが違うがね」

「だってその、普通じゃ警察でも抑えられない連中 三桜も含む超常つてのを抑えられるから成り立っているんでしょ？ どうやって？」

「結界寮の住人達が力を振るうのさ。私様の知る限りでは『結界屋』『傀儡屋』なんて希少な裏稼業も結界寮には居るらしい。おまけに管理人は以前、世界危険勢力の一員として名を馳せていたという噂もある」

……結界屋も傀儡屋も世界危険勢力同士の抗争に駆り出されるような裏稼業だぞ。警察に例えるより軍隊に例えた方が適切じゃないか。いくら並折といえども、そんな奴らが目を光らせては無法とは

縁遠くなる。

そして、世界危険勢力の元構成員の存在。

成程……純血一族ほどの組織が大々的に手を出さない事実には納得した。並折の街は既に一勢力として完成しているのだ。これは三桜でも迂闊に目立つ行動はできまい。

「で、今あそこの結界寮ボーイに話を聞いてきたんだけど」

三桜は先程まで話をしていたニット帽の青年を親指で示す。

「あいつらもこの駅を調べに来て、八号車両惨殺事件に遭遇したそう。電車が停止してそれほど時間が経っていないうちにだぞ？ どうやら結界屋の感知結界は並折全体を覆っているらしいな。街中に結界寮の目があるようなもんだ」

……うん？ 今の話、ちょっと引つかかる。

三桜は当たり前のように話しているけど、結界寮の連中は八号車両の事件を感知して此処へ来たわけではないのか？

そのまま疑問を彼女にぶつけてみると、あっさり頷かれた。

「結界屋が感知するのは刃物や銃火器等の危険物なんだよ。今回の場合、屋外 しかも駅で反応があった。んで異常の可能性ありと判断したから来たそうな」

まさか。

結界屋が感知したのって、私の折り畳みナイフ？

もしそうだとしたら、結界屋なら私のナイフの在処がわかるかもしれない！

暗闇の中に光明が差し込み、なんとか結界寮の連中と関わることはできないものかと彼らの方を見やる。

結界寮の三人は、この場を去ろうとしていた。

二人の女性と青年が何かを話している。

「小僧！ 車両の中身はもういい。私と林檎りんごは、これをやった奴を追う」

アイシャドウの女は、見た目通り気の強い人物だった。

小僧と呼ばれた青年は困ったように腰に手を当てる。

「梵おんさん、いい加減その小僧って呼び方やめてくださいよ」

どうやらアイシャドウの女は、梵という名前らしい。もう一人は林檎か。

「うるさい。私は気に入った奴しか名前で呼ばん。お前なんか小僧だ小僧」

悪戯つぼくしかめつ面めんで舌を出す梵という女の横で、もう一人の温厚そうな女性 林檎が青年を宥めている。

「ごめんね伊佐乃君、梵ちゃんってこういう子だから……許してね」
「むっ」

明朗と呼ばれた青年は、ふてくされたように口をすぼめていたが、林檎に言われるとすぐに顔が緩んだ。わかりやすい男だ。いや、私もあの林檎という女に見つめられて頼み事でもされたら聞き入れてしまうかもしれない。

「まあ……いつもの事なので気にしてないですよ。梵さんと林檎さんはこのまま追跡を続けるんですね。じゃあ僕は？」
「要らん」

梵が吐き捨てるように言うと、明朗はにこやかに笑いながらも青筋を立てた。

「ああ、そうっすか！」

梵は明朗を無視してそのまま改札出口へ足を踏み出す。

隣で二人のやり取りを見ていた林檎は明朗にもう一度「ごめんね」と言い、梵に追従した。林檎が両手で梵の腕にしがみつく様は、まるで恋人のようだ。この女性同士は仲が良いらしい。

そのまま後ろ姿を目で追い、二人が改札を出たところで　　どうやら彼女達は仲が良いどころではなさそうだと思った。

女同士のキスなんて初めて見たよ私。

あの二人は行ってしまい、残された明朗は目的を失ってしまったので呆然とその場に突っ立ったままだ。

ようやく駅の前に数台のパトカーや救急車が停まり、警官が何人もホームへと駆け込んで来るようになった。どうせ全ては結界都市によって徒労に終わるのだろうが。御苦労様だ。

幸い　　ではないが、私は持っていた唯一の武器を盗まれてしまったので聴取を受けても問題は無い。が、三桜がどう動くかわかったものではないので早々に立ち去った方が良さそうだ。

「三桜、行こう」

まだ明朗の方を見ながら、隣に居る筈の三桜へ声を掛けた。

しかし返事は無い。

「三桜？」

視線を隣へ向けると、彼女の姿は無かった。

見回すと、三桜は少し離れた場所で背を丸めてホームの地面を凝視していた。ポケットに両手をつっ込んで誰かに話しかけている。横で同じく背を丸めている女性に絡んでいるのか。あっちへチヨロチヨロこっちへチヨロチヨロと、忙しない女だ。

それにしても二人合わせて実に奇妙な光景だった。

「なに？　何か美味しいもんでも落ちてんの？」

「い、いえ。指輪……指輪を無くしてしまって」

「どんな？」

「玩具の指輪なんですけど……」

「オモチャだあ？　そんなもん必死に探してんの？　貴様」

「大切な物なんです！」

「あ、そう。そこでこの辺に落としたの？」

「多分……この辺りじゃないかと」
「この辺？」
「はい」
「どの電車から降りたの？」
「え。あつちの……路面電車です」

路面電車？ ああ、たしか並折を走るのは路面電車だったっけ。
きのえと駅含む四つの駅を繋ぐ路線かな。

「どこ行つてたの？」
「お墓参りです」
「誰のお墓？」
「妹のです……」
「あ、そ。墓地ってどこにあるの？」
「つちのえと駅を降りてすぐですよ」

それにしてもしつけえ女だ……指輪を探す女性もさぞ迷惑だろう。
誰のお墓？ ってお前全く関係ないじゃん。

「ふーん。あつ、もしかして。『その落とした指輪は妹から貰った物なんです』とか言うなよ？ 言うなよ？ 絶対だぞ？」
「妹から貰った物ですよ」
「言っちゃった！ 言っちゃったー！」

お前誰だよ本当に鬱陶しいな。
いきなり話し掛けてきたかと思えば質問の嵐。しかもその内容は実にどうでも良いものばかり。そんなに暇なら他を当たれ。

お前が背中を丸めているのはどうせ指輪探しを手伝う為じゃないだろう。寄せた胸を通行人に見せて反応を楽しんでいる事くらい気付いているんじゃないかこの雌狐が。

以上、女性の心中を代弁。

「妹可愛かった？」

「ええ、とても」

「そっか」

「あ。そういえばまだ倉庫に写真を残してあるかも……」

「倉庫？」

「ええ。はあ……これからまだ掃除があるというのに……」

「掃除？ どの？」

「宿です宿。使っていないんですけどね、定期的に手入れしないと……」

「えっ、マジ？ 宿？ 貴様の？」

三桜の目の色が変わった。私の目の色も変わっている筈だ。

そう。私達はまだ住む場所を決めていない。三桜の頑張りどころだ。

「私様達、まだこの街に来たばかりでさあ」

「はあ。そうなんですか、ようこそ」

「こう見えて体力には自信がある！」

「ふふ、そう見えます。素敵な身体つきです」

「だから、私様が一緒に指輪を探してあげるよ」

「本当ですか？ 有難うございます！」

「うん、それでさ、貴様の空き宿を借りたいんだけど」

「宿をですか？」

「うん、拒否したら殺す」

うん、最後が駄目。最後だけが駄目。大変残念です。

宿を借りるまでの流れを上手く形成していったにも関わらず、最後が極端に駄目。

女性は三桜の言葉を冗談と捉えたようで、笑っていた。

「あら、それでは拒否できませんね……」

「だろう？」

「構いませんよ、宿の掃除もして頂けると助かります」

「任せておけ」

「では、指輪探しを続けましょう」

「任せておけ」

「ああ、申し遅れました。私、やがみせい矢神聖歌と申します」

「私様は守野三桜」

交渉成立だ。よくやった三桜、宿を確保できたぞ。

あとは指輪探しを頑張れ。

さて……私は、

「宿が決まったようで良かったね」

振り向くと顔の前に明朗青年の姿があった。私と同様、三桜と聖歌のやりとりを見ていたらしい。

たしか結界寮の住人だったな。好都合だ。この男と親交を深めておけば結界屋へと辿り着けるかもしれない。そして鎖黒の在処を突き止めるのだ。

「うん、ひとまず落ち着く場所が決まった」

「まあ、僕が結界寮を紹介しても良かったんだけど……」

何？ 馬鹿三桜め、余計な交渉をしやがって。

「結界寮って、あたし達でも住めるのか？」

「あはは、冗談だよ。君達が平穏を望むのなら、結界寮は避けた方が良いからね。特に此処へやってくる人つてのは、逃亡者が多い。だから無闇に誘ったりしないよ」

ち、それもそうか。結界寮の住人になるって事は、その特性上この街に蔓延る危険と向き合わなければいけない。鎖黒の無い私には

荷が重い。

いや待て。ならこの青年も？

「明朗君だったよね、君も結界寮の仕事を手伝う身なんですよ？」

「明朗でいいよ。うん、そうそう、結界寮の仕事を手伝ってる。でもって、君の言いたい事はわかる。僕も相応の力を有するのかわかって事だろ」

その通り。

「僕は梵さん達のパシリだからねえ……危険に見舞われたら、あの人の影に隠れてるような奴さ。結界寮でもそんな奴、僕くらいだよ」

明朗は苦々しく笑った。つまり無能って事か？ よく生きていられるものだ。いやむしろ、よくそれで結界寮に住もうと思えたものだ。

「ん、まあ、つまりそういう事だから。僕みたいなのは例外。君は宿を見つけれられたのだから、そっちに住むべきだよ」

だろうね。鎖黒はなるべく自力で見つけるようにしよう。

結界寮には関わらない方がよい。

「あ。改めて自己紹介するよ。僕の名前は、明朗！」

ちよつと待て。自己紹介？ いやいや、だって私はもう結界寮には、

「君の名前は？」

「……天宮柘榴」

いやほんと無駄でしょこの自己紹介。要らないでしょこのやりとり。

「あまみや……ざくろ？」

「うん」

「ざくろって、あの柘榴？」

「そう、あの柘榴」

「学名プニカグラナタム、開花時期は六月上旬から七月下旬という

ザクロ科ザクロ属の、あの柘榴？」

「そうだよ」

どこかの資料から一文を引き抜いてきたような確認方法は何？
とりあえず相槌を打っておいたが、私は人間であり果実ではない。
名前が果実と同じというだけだ。いちいち確認する事でもないけど
さ。

私の名前のどこに惹かれる部分があるのか皆目見当がつかない。
しかし明朗の感性のどこかに引掛かったのだろう。彼の表情は花
が咲いたように明るくなっていた。

「ねえねえ、僕も君たちの宿へ遊びに行ってもいい？」

明朗はいきなり無邪気にとんでもない提案を持ち掛けてきた。

いやお前……だからね、たった今、結界寮に関わらない方が良く
という結論を出したのに。というか平穩を望むなら云々 と、こ
いつ自身が言っていたではないか。

「いいでしょ？ ちゃんと、あつちのお姉さんにも了承を貰うから」
そう言って三桜を指差す。彼の頭の中では、きつと愉快なBGM
でも流れているのだろう。やたら上機嫌だ。

脳内ライブ会場こと明朗。

彼は、聖歌と共にホームの床を睨み続ける三桜の方へ軽快な足取
りで近付いてゆき、私の時と同様に上機嫌のまま交渉を始め、右ス
トレートを一発貰い、愚鈍な足取りで私の元へ帰ってきた。

「貰ってきたよ」

パンチをね。

「拳に了承の意を乗せて僕に渡したんだよ」

「おめでたい解釈だな」

「万に一つ、百歩譲って、十中一二（十中八九を元にした明朗の造
語）、今のがただのパンチだったとしても。これで彼女はパンチ一

発分の借りが僕にできてしまったことになる」

「質の悪い解釈だな」

最早付いてくる気満々である。

そしてこの後、一時間近く聖歌と三桜は指輪を探していたが結局見つからなかった。

矢神聖歌という女も、やはり並折の住人だった。

その丁寧な物腰からは想像もできないが、外界では相応の事をしていたという事なのだろう。その点については詳しく触れなかった。とにかく外界ではどうにも逃げられなくなり追い詰められていたところを、並折という結界都市を紹介され、命からがら逃げ込んだという。

彼女はきのえと駅を出て宿へと向かう道で、私達に自ら話してくれた。

「だから、私は並折へ訪れる方にはできる限りの協力はしたいと思っっています」

先頭を歩きながら嬉々として語る聖歌。

私はそんな彼女の背中が、少々危なっかしく見えた。

「それはそれで危険な気もするけど……」

私達のように危害を加える可能性の無い者ならまだしも、それなりに危険な奴へ協力など申し出てみる。散々利用された拳句、下手をすれば殺されてしまうぞ。

「柘榴ちゃん、そういった事にならないように僕達結界寮があるんだよ」

まあ、彼女の心遣いが無ければ、こうして宿を提供してもらっ事もなかったわけで。私に彼女の意思を否定する権利は無い。

「ねえ柘榴ちゃん、聞いてる？」

「黙れ弱肉」

「痛い！」

三桜が明朗の内腿へローキックを放った。

そんな光景はどうでもいい。

私は二人よりも歩みを進めて聖歌の隣を歩くことにした。

前だけを見て肩を揺らす矢神聖歌。

きのえと駅で会った時も、不思議な笑顔をする女だと思った。

上品。という表現が適切なのかもしれぬが、その単語一つでくくってはいけない気がした。

私よりも背の高い聖歌の顔は、空を背景に煌めいて見えた。

(デュアルフェイス……)

その一言が頭を過ぎる。

その一言が私の安心を許してくれない。

その一言が聖歌への好意を妨げる。

この聖歌も顔は一つではない。と、卑しき思考回路に導かれる。表情も言葉も一つの顔で、決してそれだけを信じてはいけなないのだ。

人間には顔が二つあるのだから。

矢神聖歌は並折の住人で、過去に並折の結界を求めてやってきた逃亡者。

並折に来なければならなかった逃亡者。

だから彼女の煌めいて見える顔も偽物だ。

丁寧な物腰も言動も、柔らかい笑顔も、親切な行動も。全部、作り物なんだ。

人間なんて大嫌いだ！
心なんて大嫌いだ！

こんな物があるから偽る。隠す。装う。
そして私のように疑う。怪しむ。嫌悪する。
惑わすくらいなら、顔などなければ良いのに。

……さつき駅前を通った時に私の目を引いた物のように。

それは駅前広場の中心に設置されていた像だ。
なにやら空を見上げて両手を伸ばす子供の像。

まあ、駅前に像が設置してある事は珍しくないのだが、気になったのはその子供の像には顔が無かったからだ。

だからその子供に表情は無く、ともすれば一体どんな表情で空へ手を伸ばしているのかもわからない。

雲を掴もうと必死になっているのか、空の綺麗さに顔を綻ばせているのか、はたまた助けを求めているのか。

像は半被はつびを着ていたので体型がわからなかった。彼か彼女かも区別できない。

とにかく、一体あの像が何を表現しているのかさっぱりだった。
ああいう場所に飾られる像って、何か象徴するものやテーマがあって然るべきじゃないのか？

なんだかもやもやするだけのオブジェクトだった。
左右が対象ってところは好感が持てたし、顔が無い存在は羨ましかった。

象徴……。

顔の無い像が象徴するのは一つしかない。あの像は、カオナシの伝承を象徴しているのだ。だって顔が無いし。見たまんまだ。

カオナシの伝奇は並折へ来る前に番の姉さんツガイから聞いた。

ということは、あの像の子供がカオナシ？ どうでもいい。像に用は無い。

用があるのは、本物の方だ。

ちなみに番姉さんは正真正銘、生粋純粹、實在顕在の、雪女様だ。あの妖怪雪女。

ただし日本で目撃されたから日本でそう呼ばれているだけであり、あの人がどこで誰から生まれて育ったのかは不詳だ。

とにかく番姉さんみたいな、とんでもない能力を持った人間が、妖怪として記録された例もあるという事を私は知っている。

なら妖怪カオナシだって、実在する筈だ。

私が並折へ来た目的は カオナシ。

そいつを見つける事。

なのだけれど……並折に来て早々、肝心の武器を無くしてしまっ
た。

カオナシ搜索より先に鎖黒の搜索だ。あれがなきや本末転倒。

先が思いやられる……。

(今は、流れに従うしかない)

強い日差しに晒されながらも隣を歩く聖歌の顔はとても涼しげだ
った。

まだ陽が昇り切っていないからでもあるだろう。

私もあまり汗をかいていなかった。

彼女の手元では、線香の束や鉢、マッチの入ったビニール袋が揺れていた。

「妹の墓参りだっけ」

話し掛けると彼女は顔を崩さずそのまま頷いた。

「ええ。今日　六月の二十四日は、妹の命日なのです」

「聖歌は朝一番に行つてたの？」

「ええ。並折を走る電車は、始発便が早く出ますから」

「そうみたいね。あたし達の乗ってきた始発が到着した時には墓参りを終えていたんだから」

「普段はあんなに人が混雑しないから、きのえとに降りた時は驚きました。ホームで大混乱が起きているんですもの」

「八号車両惨殺事件……聖歌はどう思う？」

私が問うと、聖歌は口元を結んで小さく唸った。

「うーん。当然ですけど、あれをやった犯人は、柘榴さん達と同じ電車に乗っていたって事ですよ。そして柘榴さん達と同じく、並折で降りるつもりだった」

改めて考えると、私が気を緩めて一号車両に乗っていた時も八号車両には犯人が乗っていたというのは、気持ちが悪い。

聖歌は続ける。

「どうして八号車両なのか。どうして車両内全員を殺したのか。動機が不明です。無差別殺人に間違いないのでしょうか。外界からの情報でも、そんな無茶苦茶な事件は滅多に聞きません。そもそもですよ　？」

聖歌は顔を横へ　私の方へ向け、視線を合わせた。

「そもそも、並折という結界都市へ訪れるのは、並折の結界に頼らざるを得ない事情がある者ばかりなのです。つまりその殆どが逃亡者。しかし今回の事件は、下手をすればきのえと駅へ到着する前に電車が急停車し、その場で 並折の結界外で事件が拡散してしまいかねなかった。運転士が駅に近い位置だから駅まで電車を運ぼうと判断したから、この件は結界によって外界に漏れずに済んだのですよ」

確かに……聖歌の言う通りだ。

犯人は事件が外界に漏れることなど気にしていなかったという事だろうか。

「考えられるのは、犯人が『頭を盛大に御壊しになられた方』もしくは『逃亡者ではなく、別の目的で並折にやって来た方』であるという事ですね」

どちらもあり得る。

あんな虐殺を行う奴は、正直頭のいかれている奴としか思えない。三桜もその点の異常は認めるだろう。彼女はそういう奴が居る事にいちいち動揺するのをやめると言ったただけだ。

だから聖歌の言う前者 犯人が頭を盛大に御壊しになられた方である可能性は十分にある。むしろあの虐殺を行う者を思い描くには後者よりも前者の方がしっくりくる。

それはそれで厄介だが、もっと厄介なのは後者だろう。

後者は 並折で何かを行うという目的を持って現れた、という事になる。今、聖歌が言ったように八号車両の件は下手をすれば並折で処理されず日本全国へ知れ渡ってしまったかもしれないのだ。それを、目的を果たす前に行ったという事は、己が目的を果たす為にあの虐殺が必要だったという事だ。

「ねえ聖歌。貴女は二通りの考えを出したわけだけど。あたしにはその考え　とても甘ったれて聞こえる」

「そうですね……私の考えは、もっと悪い方へ考える事が出来ます」

「あたしなら、『頭を盛大に御壊しになられた方が、逃亡以外の何らかの目的を持って並折に来た』と考えるもの」

「考えたくもない最悪っぷりですよ、それ」

「同感」

「おそらく有り得ないであろう希望的考察は、『犯人は偶然、並折手前で犯行に及んでしまっただけ』といったところですけど」

「そこまであたし達もお気楽な頭をしてないわよね」

「ええ」

聖歌の宿はきのえと駅から歩いた方が早いと言うので、彼女の言う通り私達は四人連なって歩いてしたが、駅から離れるにつれて私達は自然と身体の距離が密になっていた。

広い車道や歩道は駅の周囲だけで、車道から離れた今となっては緑豊かな植木に挟まれた歩道が続くだけだ。

ひたすら長い階段が続くが、しかし疲れを感じさせない穏やかな傾斜。

階段道を上りつつ振り返ると、眼下の景色に心奪われた。

家屋が一定の間隔で立ち並び、街の様子が一望できる。

海岸沿いに走る車道の向こう側には　そう、海だ。

燦々と注ぐ陽光に磨き立てられたように、硝子の粉を撒いたように、輝く海がそこにはあった。

目下に広がる一面の海と、緑と、家屋。私の立つ場所は、随分と高い位置なのだと実感した。

蝉時雨に包まれて、一層夏を感じる。

結界都市、魔都などと呼ばれる並折の街は、こんなにも綺麗で穏やかな自然に囲まれていた。

しかし 八号車両惨殺事件の現場を目撃した直後に、まるで何事もなかったようにこうして感傷に浸る私は、おそらく異常の類なのだろう。

それが少し哀しかった。

更に細い歩道を進んだ先に聖歌の管理する宿はあった。林の中にひっそりと佇んでおり、門に大きな看板が飾ってあった。

羽田立荘と書かれていた。

読み方は、はだたち だそうな。

正門をくぐると、うねる石畳が続き植木の奥に母屋が見えた。どの植木も手入れが行き届いていて、随分立派な庭である。専属の庭師でも居るのだろうか。

興味本位で付いてきた明朗もこれには驚いたようで、緑に挟まれた石の床で棒立ちになっていた。

三桜が聖歌に訊いてみたところ、やはり此処は元料亭だったとの事。

此処が私と三桜の並折に於ける住まいとなるわけだ。

少し気持ちが高ぶった。が、よくよく考えるとこの立派な庭の手入れも私達がしなければならぬという事に気付く。すると高ぶった気持ちは急降下。母屋までの石畳の長さに比例して気も重くなつた。

体力には自信があると豪語した三桜と、とりあえず多少は使えそうな明朗。二人には頑張ってもらおうとしよう。私は……そうだな、屋内清掃を頑張るよ。

「二人だけではこの宿も広すぎますので、私も此処に居を移そうと思います。お食事の支度は任せて下さいね」

小さく拳を握りながらそう言ってくれた矢神聖歌に、私と三桜が歓喜のあまり抱き着いたのは言うまでもない。

どさくさに紛れようとした明朗は三桜が阻止した。

家賃や生活費の心配は、実は要らなかった。

三桜は純血一族という異常ながらも名家の人間なので、そういった心配はしたことが無いらしい。見た目に似合わずお嬢様だった。

羽田立荘の庭を見ても驚かなかった彼女は、もっと立派な庭を見慣れていそうだ。

私もその辺の心配はない。

私の手荷物といえはこの手提げバッグ一つなのだが、その中には十分な量の現金と、鎖黒しか入っていないからだった。

だからこそ、鎖黒だけを盗まれた事が甚だ疑問なのだけだ。

羽田立荘は立地も好印象で、此処ならば腰を落ち着けられそうだ。

しかし 少なくともこの六月は、落ち着いて鎖黒の搜索ができそうにないと悟った。

母屋へ入った私達を待っていたのは、埃だらけの廊下や置物。部屋に到っては障子の張り替えと壁の補修が必要な有様だったのだ。

聖歌は随分長い間、屋内を放置していたと思われる。どうして庭だけ手入れしてあるんだよ……。

逃げようとした明朗は三桜が取り押さえた。

私 天宮柘榴が並折を訪れた二〇〇六年六月二十四日。

魔都と呼ばれる結界都市での最初の作業は、掃除であった。

「だあー、あつちい」

羽田立荘の玄関を抜けた先　ロビーには、テーブルと椅子だけでなく六畳程の畳が敷かれたスペースがある。その上に小さな卓袱台が設置されており、座椅子に腰を落ち着かせられる。

守野三桜はそのスペースに寝転がり、ソーダ味のアイスクャンディを啜っていた。

私はロビーの隅にあつた雑誌棚から新聞を引き抜き、椅子に座つて彼女を一瞥。

そして頬に汗を伝わらせる彼女の格好に深い溜息がもれた。

上はタンクトップ一枚。下は……下着一枚。

はしたない。はしたないにも程がある。

自室でその醜態を晒すならまだ許せる。が、ここは先述した通り玄関が上がつてすぐの場所だ。弁えてほしいものだ。

三桜は構わず畳の上で仰向けになつたり、うつ伏せになつたりを繰り返している。引き締まった体型をしているが、色は意外と白い。庭の掃除をしていたので少し陽に焼けている部分がくつきりと解る。

「ああ、暑い……暑い……」

口からアイスクャンディを引き抜き、長い舌を出して喘いでいる。冷房も扇風機も無いからね。私だつて暑い。

三桜が寝転がる場所の周囲には、木彫りの熊や綺麗な模様の描かれた皿、将棋盤などの置物がごろごろと転がっている。

全て此処のロビーに飾つてあつた物だ。どれも埃を払って布で拭き、見栄え良く並べたというのに。こいつは「ひんやりした物を…

…」とか言って掻き集め、枕にしたり腕に抱いたり、散々弄んだ拳を放置しやがるのだ。

ちゃんと片付けとけよな。

「おーい、クロちゃん」

三桜はにやにやと顔を歪めながら視線をこちらへ送ってきた。

「やめて」

「私様に言っなよ、付けたのは明朗の奴だぜ」

そう　私は、明朗の馬鹿野郎に『クロちゃん』という奇怪な綽名を付けられていた。

私の、ザクロという名前から取ったらしい。迷惑極まりない上にセンスの欠片もない。

面白がって聖歌までクロちゃんと呼ぶ始末だ。

「で、何よ」

「何読んでのかなーって」

「見りゃわかるでしょ、新聞よ」

「じゃあさ、新しいアイス取って来てよ」

何が「じゃあ」なんだ。私は新聞を読んでいると言っているだろう。

三桜はアイスクャンデイの棒を振って白い歯を覗かせる。「おかわりー」ってか。ふざけんじゃねえよ。

「お断り」

「えー。だつて私様、動きたくない。柘榴が行けよー」

「何よ、あたしをパシリだと思ってるわけ？」

「強者の為に弱者が働くのは当然だろうが。私様はアイスクャンデイを御所望だ。機嫌を損ねる前に可及的速やかな行動を勧める」

「勝手に損ねてるコミ」
「コミって……」

悲愴な表情で手からポロリと棒を落とした三桜は無視して、私は新聞を読む。

ふむ……やっぱり八号車両の件は載っていない。

案の定、並折の結界が効果を発揮したんだな。

しかし気になる記事を見つけた。

大きな字で『駅構内でバラバラ殺人』と載せられている記事だ。

私が並折へ来る前日に駅のホームのトイレで死体が見つかったという。並折からなら電車を三、四回乗り継げば着ける駅だ。

被害者の名前は 無い。遺体の損傷が激しく、現在DNA鑑定による身元の確認を急いでいるが、数日前から行方不明となっている百坂さん宅の長男ではないかと予想しているらしい。よく駅を利用する普通の会社員だったさ。

遺体は見出し通り四肢を切り取られた状態だったのだろう。八号車両惨殺事件と似ている。いや、犯行場所からして同一犯の仕業に違いない。

思った通り。あれをやった奴は、逃亡者なんかじゃあない。そして並折の結界など求めてもいない。

明朗は、あの後犯人を追った女達 梵と林檎からは確保したという報告を聞いていないと言っていた。つまり八号車両で大量殺戮を行った奴は、まだこの並折に居るかもしれないって事だ。

結界寮の追跡を回避した事に明朗も驚いていた。

「おいこら、柘榴。私様のアイス」

「わ、びっくりした」

三桜がいつの間にか私の隣まで来ていて、顔を近づけていた。

「気が散るからやめて」

「何をそんなに熱心に……」

アイスの棒を唇で挟み、ぴこぴここと上下に動かしながら、彼女は新聞を覗き込んだ。

畳のスペースから此処まで歩いてきたなら、そのままアイスを取りに行けば良いだろうに。

「ああん？ 六月二十五日の朝刊？ なんでこんな読んでのさ鼻で笑われ、新聞を取り上げられてしまう。」

「雑誌棚にあったからよ。いいから返して」

「まあ聖歌の奴が持ってきたんだろうな。それより早く！ アイスイ！ 暑さで私様が死んじまう」

新聞を取り返そうと腕を振る私を面白がって、三桜は飄々と逃げる。

「わかった、わかった……」

諦めた私は椅子から立ち上がる。

納得できないけれど、これ以上付き合つのも面倒だ。

ロビーを離れ、台所へと向かう。

その途中で矢神聖歌と鉢合った。

「あらクロちゃん」

「……洗濯物、干し終わったの？」

もう聖歌は私の呼び名をクロちゃんて定着させてしまっていた。

「終わりましたよ。そうだ、良いお茶が届いてるの。三桜ちゃんも交えて一緒に飲まない？」

「うん、構わないけど。あ、なら台所へ向かうの？」

「ええ」

「三桜がアイスクャンディを欲しがっているから取って来てくれな
いかな」

「アイス？ お茶と一緒に食べるのかしら」

あー。

いや、三桜はエスパーじゃないからこれからお茶を出されるなんて思っていないよね。

「やっぱりあたしが持っていくよ。聖歌がお茶を入れる間に食べちゃうだろっから」

「そう、じゃあ行きましょう」

「ほら持ってきたぞ」

ソーダ味のアイスクャンディを三桜に渡す。

「おお！ ありがとう……うむ、御苦労だったな柘榴」

こいつ滅茶苦茶腹立つわ。

それにしても冷凍庫の中に大量のアイスが敷き詰められていて驚いた。いつの間に。

「私様は暑いのが苦手だからねえ。夏場は必ずアイスを買って込んでおくのさ」

アイスクャンディの角をいきなりかじりながら、何故か自慢げに言う。

「その代わり、寒さには滅法強い」

「へー。冬は平気なんだ」

「平気なんてものじゃないね。全裸でも過ごす自信がある」

「冗談だと信じたい。」

「特に日本の冬なんて私様にとっては寒いうちに入らないさ。極寒の地での任務といえば、守野三桜様。これ常識ね」

いや、そこまで言われるとあながち冗談とも思えない。

純血一族、守野家の能力に関係しているのか。

「極寒の地での任務……雪山とか？」

問うと、三桜は片目を閉じて微笑んだ。

「そうそう。最近あまり引き受けないけどね。十二の時から十一年前か。外国の山岳部隊に雇われてた事もあるんだよ」

若かったねえ。と、年寄りくさい事を言いながら子供のようにアイスを夢中で頬張る。

純血一族、守野家の女。

守野三桜 か。

「な、なんだよ、そんなに見つめて」

「んー？ なんかさ、三桜って変だなあとと思って」

「さつきから失礼だな貴様」

「だって変だもん」

「どこが。美しいと言われる事はあっても変と言われる筋合いはない」

「あたしがイメージしてた純血一族の人間とは、違うもん」

三桜は確かに普通とはズレているかもしれないけれど、許容できる範囲な気もする。

「んあ、私様が？ そりゃあねえ……多少の営業スマイルはできるよ。そうじゃなけりゃあ、先遣として並折に送られたりしないさ」

「営業職みたい」

「営業なんかしなくても殺しの依頼は後を絶たないけどね。純血一族は殺し屋さんの老舗だから」

「お金貰って殺す。それが殺し屋でしょ。あんた達はお金貰わなくても好き放題殺しまくってるじゃない」

「おいおい勘違いするなよ。私様達にも理性がある。依頼で殺しを請け負うだけだ。ただ、殺人衝動に負けた奴は無意識の殺戮を起こすけどね。でもそういう奴には当然ペナルティが課される。だから理由なき殺人つてのは一族的には御法度なのさ。一応、ね」

「でも、なんだかんだで殺人が大好きな奴がごろごろ居るのも事実でしょ」

「うん。殺したいから殺す、立派な理由じゃないか」

……結局、殺したくなったら殺すんじゃないか。

二本目のアイスを食べ終えた三桜は、ぺろんと口から棒を引き抜くとそれをゴミ箱の中へ放った。

「お茶の準備ができましたよー」

聖歌の声だ。

三桜は畳の上に座り直し、卓袱台に頬杖をついた。

「お茶？ こんな暑い日に」

「まあ！ 三桜ちゃん、その格好は何ですか！」

「え？」

「女の子がはしたないですよ！」

「だ、だって暑いから……」

「ちよつとは我慢しなさい！ ほらクロちゃんも座って」

聖歌は湯呑を三つとポットを乗せた盆を卓袱台に置き、にこやか

に私を手招きした。

「なんじゃこりゃ」

「キーマンという紅茶だそうですよ。良かった、間に合って」

見慣れないお茶を出された三桜が困惑の声を上げるが、対して聖歌は実に嬉しそうだ。

お茶一つで……。

私も三桜もその点に関しては同じ考えだった。

「どうしてまた……」

「だって今日飲みたいじゃないですか」

「よくわからん」

うん。三桜の言う通りよくわからない。

別にお茶に関して詳しくないから、聖歌の嬉々とした声にもどう反応して良いのやら。

同じ一つのポットから注がれたお茶を三桜が口にしてから、私も湯呑に手を出していた。

これは羽田立荘に来てから常習化させている事だ。

頻繁に台所に置いてある調味料の中身や、棚の中もチェックしている。

聖歌が料理をする際はさりげなく様子を窺うし、買い物から帰ってきたら袋の中を見る。

悟られないようにこれらを実施するのは骨が折れるけど、毒を盛られるよりはマシだ。

(嫌な女だなあ……私は)

その自覚はあった。

「じゃ、私は買い物に行つてきますね」

お茶を一杯だけ飲み終えた聖歌が立ち上がる。一杯で満足したらしい。

「ついでにこれ、出しといて」

三桜が封筒を渡した。

「はい。他に御用はありますか？」

「ないよ。いつてらっしやい」

「クロちゃんは？」

「あたしもないよ」

私も三桜に合わせて首を横へ振った。

なんだかんだ言つて三桜はお茶を三回もおかわりしていた。

玄関を出た聖歌の、誰かに挨拶する声が聞こえた。

「あら、いらっしやい」

「こんにちは聖歌さん！ クロちゃん居ますか？」

この声は明朗だ。

「ロビーに居ますよ」

「ありがとう！ あといつてらっしやい！」

「はいはい」

私はあぐらをかいて座る三桜を蹴っ飛ばした。

「痛！ なんだ急に！」

「服を着てこい服を！」

「ええ……」

「下着も脱がすぞ！」

「わかった、わかったから……」

さすがに全裸を明朗に晒すのは抵抗があるのか、三桜はそそくさと自室へ向かった。

三桜の醜態を目にすることなく、少しして伊佐乃明朗がロビーへやって来た。

初めて会った時はニット帽を深く被っていた彼だが、今日は被っていない。明るく染まった髪はワックスで固められている。その上に大きなヘッドホンを付けていた。

そしてなぜか片目に眼帯。

「こんにちはクロちゃん！」

「目、怪我したのか？」

「え？ ああ、これファッションだよ」

「ペろん、と眼帯をめくってウインクしてくる。」

結界寮の住人は奇抜な格好を好むようだ。

明朗はスニーカーを脱いで畳に上がると、私の隣に座った。肩までくっつきそうになる距離だ。

「調子はどう？ クロちゃん、もう並折には慣れた？」

もう一度言うが、『クロちゃん』というのはこいつが勝手につけた私のあだ名だ。

「全然。街の地理も把握できてないよ」

この羽田立荘の掃除で手一杯だったからね。

私の返事に、明朗は「そっか」と相槌を打つ。

「僕がすぐにでも案内してあげたいんだけど……まだあまり歩かない方がいいよ」

「どうして？ 聖歌はいつも通り買い物に出かけたじゃないか」

「ああ、えっとね。今は大丈夫だけど、結界寮が最近妙に神経質に

なつててさ……僕でも梵さんと林檎さんから許可を貰わないと外出できないんだ」

「何か、起きているのか？」

「……わかんない。起きているのか、起きようとしているのか、結界寮でも把握に時間がかかっている」

「六月の事件関連？」

「うーん……」

明朗は唸り、近くに転がっていた将棋盤を卓袱台の上に乗せた。同じく転がっていた将棋の駒を幾つか手に取る。

ぱちん。

彼は将棋盤の中心に『歩兵』の駒を置いた。

広い盤の中心に、駒が一つだけ。

「これが並折の保つ秩序。並折という盤の中心に、結界寮という唯一にして絶対の裁定機関が置かれている」

力有る駒は一つだけ。

言い方は悪いが結界寮という脅威が、街を支配しているようなものか。

この構図だからこそ、並折の秩序は保たれているのだろう。

「でも……」

ぱち、ぱちん。

明朗は更に『歩兵』を二つ、隅に置いた。置く場所に意味は無いようだ。

「世界危険勢力の一角。『純血一族』と『死使十三魔』。その関係者が、並折へ侵入した可能性がある」

胸が、大きく鼓動した。

守野三桜と私の事か？

明朗はどちらの素性も知らない。

「うちの優秀な結界屋さんが、把握できない件が増えているんだ」

「純血一族と死使十三魔……」

「そう。クロちゃんは知らないかもしれないけど、世界危険勢力と呼ばれているのは、現在三つだけ。日本の呪詛家系『純血一族』、国境なき少数異鋭『死使十三魔』、最多戦力を誇る暗殺集団『ティンダロスの獵犬』。この三勢力だ」

勿論知っている。が、ここは黙って相槌だけ打っておく。

「あまり声を大きくして言えないけどさ。ここだけの話」

明朗は私の耳元に顔を近づける。

「結界寮の管理人、梵さんと林檎さんは、元『ティンダロスの獵犬』の構成員なんだよ」

「冗談でしょ？」

「さあ、僕も詳しくは知らない。なんでも前線突撃要員だかに居たんだってさ」

「……」
「『無音』と『瞬撃』の異名で知られた超A級のプレイヤーだって自慢してた」

「……」

有名な話じゃないか。

世界的に有名な恐怖神話だろうそれは。

世界危険勢力『ティンダロスの獵犬』

最上級戦闘員で構成される前線突撃チーム。
構成員は七人。その全てが異名持ち。

『鬼人』『蜘蛛』『死神』『旋律』『無音』『瞬撃』『霸道』
今は解散したこの七人一組は、暗殺美という言葉まで生んだ連中
だぞ。

そのうち二人が、こんな街に潜んでいたなんて。冗談としか思えない。

「待つて、明朗、あんた結界寮はその二人が管理してるって言ったよね？」

「そうだよ」

「つ、つまりそれって……」

「結界寮は『ティンダロスの獵犬』傘下の組織つて事。もつと言つてしまえば、並折は『ティンダロスの獵犬』の領地。支配地。占領地。専用獵地」

明朗は将棋盤の中心にあった『歩兵』の駒を摘まみ上げ、
はちん。

裏返して『と金』の駒にした。

「だから、『純血一族』や『死使十三魔』の関係者が並折に侵入するのは、かなりまずい」

ぱち、ぱちん。

他の二枚も『と金』に。

盤の上では三枚の『歩』が三枚の『と金』になった。

「どの勢力にとつても、この結界都市は重要な拠点なんだ。日本を本拠地とする純血一族にとつて、結界寮に占領されている現状はか

なり不安で不愉快だろう。死使十三魔にとって、日本に作る大きな拠点としてこの街はかなり魅力的だろう。でも実際は――

「既にティンダロスの拠点になっている。」と

「そう。その事実には純血一族が気付いたら、どうなるか」

……自国の、懐の、結界都市に敵が陣取っているんだ。
血相を変えるに決まっている。

「だから結界寮は大慌てなのさ。下手をすれば三つ巴の戦争が始まるからね」

み、三桜が居なくてよかった……。

結界寮の正体については伏せておくべきだ。今後も。

「あまり口外するべきじゃないよ、それ……」

「うん」

「というか、あたしに漏らした意味もわかんない」

「いやあ、だってクロちゃんなら大丈夫かなって思ったんだ」

何を根拠に明朗がそう思ったのかは見当がつかない。

見当がつかない上に、明朗は大きな過ちを犯してしまった。

私の素性をよく知りもしないうちに、あまりにも馴れ馴れしいか
ら。

こいつは大失敗をしでかしたことに気付いていない。

不幸中の幸いと言えるのは、私がこの並折を離れるつもりがない
という点だろう。

「ねえ明朗、死使十三魔の事って知ってる？」

「うーん。序列一位から十三位までの少数精鋭ってことくらいしか……」
「そっか」

彼はきつと驚くだろう。

私が死使十三魔の関係者だと知ったら。

天宮柘榴が 序列四位『魔氷の番』直属の部下という事実を耳にしたら。

血鎖 其の一族、複雑につき

「あはははは！ 本当に守野三桜は並折へ行つたのかい？」

「御上からの命令だからな……仕方ない」

「うふ、うつははははは！ 君、恥ずかしくないの？ ねえ八汰^{やたぎ}祁君！ 守野八汰祁君！」

「黙れ……」

世界危険勢力『純血一族』。その家系の一つ、守野家。

守野家の本家は、日本の東北部にある。

今はこの八汰祁がそこで守野家の一切を握り、管理を任されていた。

顔の彫りが深く、皺と傷の混じった初老の男性だ。

彼は、突如やってきた若者の軽口に苛立っていた。

「うっひ、うっひいいい！ 守野の老兵はツラの皮が分厚いんだねえ！ 恥も知らないとは！ いやあ守野は所詮、守野ってことか」

席に座る八汰祁の机越しに、黒衣の若者はひょうひょうと奇怪な動きで煽る。

彼が着ているのは真っ黒に染まった白衣。

よく医者が羽織る白衣の、色が黒くなった物だ。その胸ポケットにはペンが挿され、彼の首には聴診器が下がっている。

黒衣を纏った医者の風貌であった。

「恥知らずはどちらだ。薄汚い昏^{こんくろ}黒坂の精神異常者が」

八汰祁が汚物を見る目で男を睨んだ。

「貴様達、昏黒坂家がしかした失態。よもや忘れたわけではあるまい？」

「失態？ 失態い？ もしかして僕らが死使十三魔と喧嘩しちゃった件？」

「それ以外に何がある」

「んっはあ！ おいおいそれってもう十年くらい前の事じゃん、クツソジジイ超卑屈！」

「ふざけるな。貴様達が」

「ハイ僕たちが死使十三魔ちゃんトコの序列五位ちゃんをボオッコボコにぶちのめしたから、あの戦争が始まりましたね。でももう終わりましたね」

八汰祁は呆れるように息を吐いた。

「よくもまあ、そんな、己らにとって都合の良い解釈ができたものだ」

正しくは、『純血一族』昏黒坂家が序列五位に奇襲をかけ、一度は返り討ちにされた。

その後人数を増やし、裏稼業を掻き集め、罨を張り、不意を打ち、やっとのことで五位に手傷を負わせることができたのだ。

死使十三魔も黙っておらず、報復に出た。

純血一族も昏黒坂家の要請を受け、他家系が合流した。

こうしてティンダロスの猟犬や裏稼業をも巻き込む大規模な抗争へと発展していったのだ。

「あの時、貴様らは御上に真実を伝えなかった。死使十三魔の序列五位が先に手を出し、犠牲者が出たと報告しおった。抗争終盤まで真実を隠し続けおった」

「だから？」

「その所為で、どれだけの家系が、どれだけの人員が犠牲になったか知っているのか！」

「だから、なんなのさ？」

昏黒坂の男は片脚を上げると 八汰祁の目の前に振り下ろした。その脚力で、木製の机に大きな亀裂が走る。

「結局、僕達や殺さなけりゃあ存在する意味は無いんだよわかってねーなクソジジイ。犠牲だのなんだの言ってるのは生き残った臆病者だけ。君だっけ見ただろ、同じ守野の人間が恍惚の笑みで戦争するところをさ」

「……」

「君は僕らを恥知らずと言いたいのだろうけど、違うね。僕らは欲望に忠実で、欲望に正直なんだよ」

「……ただの暴走だ」

「結構。なんでもいいよ。それよか、今年の五月に大失態を晒した君の家系の方が問題だ。話を戻そうぜ」

「く……」

男は脚を机から下ろし、黒衣を整える。

「おっと自己紹介が遅れた。僕は昏黒坂霧馬。昏黒坂家の使いね」

「ああ、既に聞いている」

「あ、そう。じゃあ早速本題に入らせてもらいたいんだけど、その前に立ったままの嫌だから椅子が欲しいな」

霧馬は八汰祁の部屋の中を見回す。

しかし八汰祁が座っている物の他に椅子は見当たらない。

霧馬は机に尻を乗せた。

もはやなにも言う気が起きない八汰祁は、その態度についても触れなかった。

「本題とは？」

「守野三桜さ。並折に行ったのは本当なんだよね？」

「本当だ。三桜様は御上の命令で日本へ呼び戻され、並折への斥候として送られた」

「……五月、関東で守野家の不完全能力者が暴れてしまった事件。

その責任をとらされて、だよな？」

「うむ……」

「疑問だ。そこがすつごく疑問。いやあ僕もさつきは過剰に表現しただけど、たかだか一人の能力者が暴れて『連続殺人鬼』としてニコラスに出されただけでしょ。その不完全能力者『守野一郎』も殺処分された。それで終わりじゃないか。なのにどうして御上はわざわざ海外から守野三桜を 守野家の『当主』を呼び戻した？ そこまでする程大きな事件だったか？ いやそんな事は無い。僕ら昏黒坂家の方がもつとクレイジーに暴れている」

霧馬の指摘に、八汰祁は唸るしかない。

老兵は驚いていた。

今回の、三桜派遣。この情報を掴んですぐに噛み付いてきたのが、まさか昏黒坂の人間だとは予想もしていなかったからだ。

「教える守野の翁」

霧馬は低い声色で囁き、八汰祁の不安を黄昏の舌で舐めてくる。

「今回、斥候として守野三桜が与えられた仕事は何だい」

「……」

「関東で、同時期にもう一つ大きな出来事が起きたよね。こちらは

闇に包まれているが。それに関連しているんじゃないの？」

「それも掴んでいたか。そうだ、一郎の件と同時期に関東で純血一族の者が負傷している」

「んっふ、んっふふふのふー。やっぱりね。それで、守野三桜とどう関連する？」

「負傷した者は、関西圏の本家へと撤退中だ。しかし追っ手を付けられていてな……」

霧馬はパチンと指を鳴らした。

「ナルホド。中部圏の結界都市、並折で一旦匿おっつてことか。その仲介役に、三桜が抜擢されたと」

八汰祁が首肯する。

うんうんと頷いて頭の中で一連の繋がりを納得させようとした霧馬だったが、昏黒坂の思考はこれらに納得できなかつた。

「それだけじゃねえだろ」

「いいや、私知ってるのはそれだけだ」

「んっふ、嘘ついても無駄だよジジイ。なんなら君をこれから昏黒坂病院へと招待してあげてもいいんだ。脳漿ぶちまけるまで情報を引き出してあげるよ」

「やってみる。知らんものは知らん」

「……」

舌を打つ霧馬。

指を鳴らし、また舌を打つ。

それを幾度も繰り返す。

(このジジイは本当に知らないな……知らない方がもっと面白い)

ぎゅるぎゅると、霧魔の目の中　瞳孔が蠢いているように見える。

「この僕があ」

霧馬の口が開き、唾液が犬歯から滴る。

「身体の一部を失った程度でどうにかなるとでも思っているのかい？　この昏黒の狂人を、君ごとき老兵がどうこうできるとでも思っているのかい？」

「やってみるか？　若造」

裂けた口から「イヒ」と嬉しそうな声を漏らした霧馬だが、その歓喜はひとまず飲み込む。

（白兵戦・肉弾戦なら純血一族最強と言われる『獣人』の守野家。この空間でやり合ったら僕に勝ち目はないだろうね）

「……望むところ。と言いたいけどさあ。うちの当主からは『穩便に』と釘を刺されているからねえ。だから僕としても穩便に事を済ませたいんだよなあ。もう一度言いますよ。守野三桜様が、お戻りになられましたら、我ら昏黒坂病院へ一報くださるようお伝えください。オツケエ？」

「考えておこう」

「けえ、別に三桜さまに不利益になるような事はしねえよ。きつと僕らの助けが欲しくなる。そんな気がするのなあ」

「貴様らの助けなど……」

「じゃあ御礼代わりに、僕らの掴んだ情報を一つあげるよ」

口を閉じ、にこやかな笑みを作った霧馬が人差し指を立てる。

八汰祁は首を傾げた。

「昏黒坂家は、死使十三魔の奇妙な動きを察知している」
「死使十三魔の？」

霧馬の閉じていた口がまた崩れ、顔がゆがむ。

「序列五位が、日本へ入国した」

「っ？」

「きひ、きひひひ。そして、見失った。中部圏でねえ！」

「お、おいまさか」

「並折へ隠れた可能性がある、僕らは見ている」

「御上に報告したのか？」

「するわけねえだろ、こんな楽しい事。序列五位だぜ？ 昏黒坂の

オモチヤは誰にも渡さねえよ」

「……私は報告するぞ」

「勝手にどうぞ。並折に居るのはまだ確定していない。でもさあ、もしそうだとしたらさあ、んふふふ。やっぱり三桜様は昏黒坂病院に来るべきだよねえ？」

「く……！」

「想像してごらん、君らの大事な三桜ちゃん。今頃どうしているのかな？ 五位の顔も見た事ないんでしょ？ 大変だあ、もしかしたら、偶然バツタリ会っちゃったりなんかして。隣同士で歩いてたりなんかして！」

八汰祁の顔が蒼ざめる。

「どうするよっ？ あんな結界都市の中。借りた宿。一つ屋根の下で暮らしちゃってたりしたらさあ！」

「三桜様に限って、男と一つ屋根の下で過ごすことなど有り得ん」
「……………」

霧馬はつまらなそうに、

「人間、持つてる顔は一つだけじゃないんだよ」
そう言ってせせら笑った。

PUNICA【六月の果実】了

PUNICA【あつたかい雨の降る夜】 1

寒いなあ。

寒いなあ。

冷たい床の上で丸くなっていた私は、身に纏ったセーラー服という唯一の布生地を両腕で抱いた。

納屋の中。壊れた屋根の隙間からは、星も月も見えない。

そうか、全部隠れてしまったのか……。

少しの明かりでもあればと望んだ私の顔に、隙間から滴った水が当たる。

ああ、冷たいなあ。

眠る事さえ、できないや。

鼻水が垂れそうになり、すすする。

夏の夜とはいえ、やっぱり冷えるなあ。

足が指の先から凍え、両足をすり合わせる。裸足は辛い。

両手は、股の間に挟んだ。

すん、と。すすった鼻に、私の身体のおいが紛れ込む。

身体、洗いたいなあ。

……ちようど雨が降っているし、シャワーの代わりになるかなあ。でも寒いから、嫌だなあ。こんな場所で裸になるのも恥ずかしいし。

こんな場所、誰も来ないのにね。

ここはどこだろう。

頑張つて走つて、こんなところに来て、私は何がしたいのだろう。

足の裏は皮がむけて血が滲んでいる。たくさん躓いて、爪はいくつか割れている。

吹き込む雨が、やたらと顔に当たるようになったので、横になっても居られなくなった。

膝を抱えて、太ももに顔をうずめて、静かに目を閉じる。

前と後ろ。交互に身体を揺らして、即席のゆりかご。

大丈夫。大丈夫。

「だいじょうぶ、だいじょうぶ……」

? 佐々奈、お母さんがいつも味方だからね。大丈夫、大丈夫

!?

身体。やっぱり洗おうかなあ。

佐々奈、お風呂が沸いたから早く入りなさい。

はい。

佐々奈、今度の大会でアンカー走るんだって? お母さん応援に

行くからね。頑張つてね。

うん、絶対に勝つよ。

佐々奈?

なあに、お母さん。

「なあに、お母さん? いいえ佐々奈、なんでもないのでよ」

……お母さん?

「佐々奈は、だいじょうぶ」

私は瞼を開き、顔を上げた。

雨の滴が屋根に反射する小さな小さな音だけが耳に入る。

真つ暗な納屋の中で立ち上がると、足の裏がコンクリートの床に擦れて痛かった。

お腹すいたなあ。

空腹を訴えるように、胃がぐうと音を鳴らす。

片手でお腹をさすり、生唾を飲み込んだ。

髪を結んでいたゴムを二つ外し、足元に置く。

私は歯を食い縛り、意を決してセーラー服とスカートを脱いだ。身体が凍える。

土に汚れたそれらも畳んで足元に置く。

同じように下着も。

ついでに洗ってしまおうかとも思ったけど、他に着る物がないので仕方ない。

納屋の戸に手を掛け、横へ引く。

雨によって浮き上がった土埃のにおいが、私の鼻を通り抜けた。

ひどい降り様だ。水滴のカーテンで、遠くが見えない。

そんなシャワーの中へ、私は進む。

緩くなった土に足が若干沈む感覚は、気持ち悪い。

「あの……こんな姿で、本当にごめんなさい」

私は周囲の墓石へ、何故か会釈なんかをしていた。

墓場という場所の中に、裸体で居るのだ。なんだか墓石に目があるように落ち着かない。

でも、身体に付いた砂や汚れは一気に流されていく。

はあ……思い切ってみて良かった。

でも、この後どうしよう。

身体を拭くタオルも無い。

火だつて起こしていない。

このままずぶ濡れで納屋の中へ戻つても　セーラー服を着ることとはできない。

畳んだ衣類を前にして途方に暮れる自分の姿が、いとも容易く想像できた。

体が冷えて、さつきよりずっと凍える思いをしながら、全身が乾くまで小さく丸まっているしかないのだろう。

わかつていたことだ。

それでも雨に打たれている今は、そんなすぐ先の事でさえどうでもよく思える。

あーあ。

なんだか、もう、本当に。

「どうでも……いや……」

雨空を見上げるが、映るのは水滴ばかり。

そんな中。

私の心臓が　ドクン、と大きく鼓動した。

張り付いた前髪が片方の目を覆ってはいたが、しかし私は狭い視界の中で確かに捉えたのだ。

墓地を囲む木々の中　よりによって私の近くの木の上だ。

そこに潜み、こちらを窺う白い見慣れない衣装を。

「え……」

呆然とするしかない。

その白い影は暗闇の中ではひときわ目立ち、そして私に視認され

た事も気付いたようだった。

「何をしている？」

言われて当たり前の言葉が飛んできた。男性の声だった。低く、威圧感のある声。だけど若さ溢れる声色。

何をしている。

そうだ、その言葉は意外でもなんでもない。こんな場所で雨の中、素っ裸で立つ私の方がおかしいのだ。おかしい筈なのだ。

白い影は木から飛び降り、私の正面に立った。

私といえば自分の身体を手なり腕なりで隠すこともせず、未だに呆然と男の姿を目で追うことしかできずにいた。

おかしいのは、自分。

だけど私にとっては裸で雨を浴びる事よりも、女として男性に全身を見られた事よりも、彼の姿に驚きと意識を持っていかれたのだ。

真っ白な忍者みたいな格好。

ニンジャ。あの忍者である。

頭部を覆面で隠した、忍装束というやつだ。

勿論、彼もずぶ濡れである。

そしてなにより私の驚きと意識を圧倒的に上回った感覚は 恐怖。

暗闇と降雨の中で爛々と輝き、今すぐにも私を殺そうとしている、彼の目だ。

「此処は墓場。女、こんな処で、何をしている？」

彼は再び問うてきた。

何をしていると訊かれても……。

「み、水を……浴びています」

「墓場で水浴び。それで？ どこから来た」

完全に怪しまれている。

いや怪しいのは彼も同じだ。

それにどこから来たと言われても答えに困る。それでも答えなければ繰り返し訊いてくるだろう。

「そのの……納屋からです……」

おそろおそろ腕を上げ、先程まで雨風をしのいでいた場所を指差した。

彼は納屋を一瞥し、強く息を吐く。

ここで私は恐怖心から解放された。それは、彼の目から殺気が失せるどころか生気まで失せそうになったからだ。

ふわりと浮いた足取りでふらつく白い忍者。

彼の身体。その一部分に視線が集中する。

左手に巻かれた包帯が血で滲んでいる。

彼には左手が無かった。

「女」

「さ、佐々奈……」

「何？」

「佐々奈といます」

「なんでもいい。とにかく……其処を貸してもらっぞ……」

そう呟くと引きずるような足運びで歩き出した。

私は彼より先に納屋へと駆け、戸を開けた。

この人は怪我をしている。消耗もひどい。

というか、手を失うような重傷は初めて見たからなのか私は少し混乱していた。

どうしよう。どうしたらいいのか。

「その怪我、病院へ行くべきですよ」

「構うな……」

「でもこのままだと危険です。なんか感染症とか、そういうの起こしちゃいますし。消毒しなくちゃ」

「消毒……？ ははっ」

間違ったことは言っていないと思うんだけど。小さく笑われた。笑ってる場合じゃないでしょうに。この人、自分の身体がどんな状態かわかっているのかな。

身体を貸そうとしても身をよじられ、手を差し出しても弾かれた。納屋に入り、彼は気づく濡れの衣装を着たまま、床に腰を下ろしてしまふ。

とにかく私は服を着よう。

濡れた身体は……スカートタオル代わりに使う事にした。背に腹は代えられない。

下着を身に付けた上に、セーラー服だけを着了た私は、再びおろとした。

この人、放っておいたら死んでしまふ。

病院へ行きたくないのかな。何か理由があるのかな。それなら私が行くしかない。

眉間に皺をよせ、気持ち悪さに耐えながら濡れたスカートに片足を通したところで 納屋の棚にもたれかかった怪我人が声を出した。

「女よ」

「だから、さつき名乗ったじゃないですか」

「ああ……なんだったか」

「佐々奈です！ 江本佐々奈！」

彼は一度だけ固まった。

でもそれはほんの一瞬。すぐにまた声を出す。

「江本佐々奈。某の事は構わなくていい」

それがし？ ああ、自分を指し示す言葉か。格好だけでなく言葉遣いまで時代が違うらしい。

それにしても無愛想極まりない人だ。私を見る目は明らかに冷たい。私の裸を見たって反応も無かった。ちょっとへこんだ。いや、自信があつたわけじゃないけど。

疲れているからとか、怪我をしているからとか、そういう一時的な状況ではあんな目はしないとと思う。

今もその視線は私に向けられているけど、人に見られているというよりもむしろ 監視カメラのある部屋に居る気分だ。普段からこんな目で生きているのかな。そう思うと、彼の機械的な言動に対してこちらは人間的な応答を貰きたくもなる。

「構わざるを得ないですよ。そんな怪我を見せつけておいて勝手なこと言わないでください」

「死になどせぬ。むしろ此処を貸してもらえたおかげで回復へ向かうだろう」

「な、なにを……言っているんですか！ そんな重傷で！」

「いいから構うな。余計な事だ。責様がどこから来て、何故こんな墓地の納屋なぞに居るのかも興味は無い。見たところ、ただの家出娘にしか見えんからな」

言われ、私は言葉を返せなかった。

家出娘……か。

「凶星か。ならば、問題なからう」

そう言って、彼は座ったまま目を閉じてしまった。

偉そうに。怪我して疲れて困っていたくせに。
別にこんな納屋なんて私の家じゃないもん。なにが貸してもらっ
た。勝手に使えばいいんだ。忍者みたいな変な格好で紳士気取りす
るな。

「私にだけ名乗らせて……」

膝を抱えて彼の前に座り、覆面で隠れた顔の中で見える数少ない
範囲 目元をじっと睨む。
隈ができてる。

何日も寝ていなかったのかな。

結局、この人は何者なんだろう。

片手を無くしてるし、普通なわけがない。危険な人だろう。
でも。

目を閉じて肩をゆっくりと上下させる姿は、この人がとても身近
な存在に思えてしまう。

お母さんも、こんなふうに眠っていたなあ。

「響」

「え？」

突然、彼は片目を開き、何かを呟いた。

「織神楽響おりかぐらひびき。某の名だ」

それだけ言うと、彼はまた目を閉ざす。

ふん、と顔を横へ向けてしまった。

やけに冷たい雨の降る、八月の夜。

墓石に囲まれたこの場所で、私と織神楽響は出会った。

PUNICA【あつたかい雨の降る夜】

PUNICA【あつたかい雨の降る夜】 2

夏の暑さもいよいよ本格化してきた。陰曆で葉月と呼ばれるだけ
はあり、羽田立荘の庭も緑一色。元の料亭が雰囲気を意識し、林に
囲まれた場所に建てたおかげで蝉しぐれの大合唱に苦しめられる毎
日を過ごしている。

耳栓を買うほど、私は繊細な神経の持ち主じゃない。だからとい
つて自分で自分の神経が図太いと表現するほど女を捨ててはいない。
だからといって私が女である事を主張したり利用したりする場面は、
これが驚くほど少ない。ほっとけ。

まあしかし困っているのは精々そのくらいだというのがまだ救い
ではある。

先月、この羽田立荘にも冷房が設置されたのだ。

この宿には人一倍暑さを苦手とする女が住んでおり、先月のうち
に溜め込んでおいたアイスクャンディを全て消費してしまった程だ。
そう簡単に無くなる量ではなかった。料亭を切り盛りしていた台
所の冷凍庫いっぱい詰り込まれていたのだ。その数は一人が一日
三本ずつ消費したとして、少なくとも三か月は保てそうだと目算し
ていた。

まさか彼女が一時間単位で冷凍庫に足を運ぶとは思わなかった。
ともあれ、そんな彼女にしてこの設備。当然のごとく大絶賛であ
る。

私と、その守野三桜、そして真偽は定かでないがこの宿の持ち主
である矢神聖歌。

それぞれの個室に冷房は設置され、更に大型の冷房がロビーにも
設置された。

資金提供、守野三桜様。

彼女のお気に入りは、ロビーの大型冷房機。

畳敷きスペースが定位置となつてしまつたようで、いつもそこに寝転がつては幸せそうに寝息を立てている。家猫がお前は。

私としても下着一枚でごねながら宿の備品を散らかされることがなくなり、冷房様万々歳といったところだ。

そんな三桜だが、ここ数日は妙に緊張した面持ちをすることが多くなつていた。

時折、ある方向の空を眺めては唸つたりする。

そして定期的なここへ遊びにやってくる明朗に対しても、あまり歓迎するような顔をしなくなった。いや歓迎する顔はきつと一度もしていないだろうが、それでも「勝手にしろ」といった具合に気にも留めていなかったのは事実。

それが、最近はおからさまに表情に出す場面も見られ、明朗もさすがに「嫌われちゃつたかな」と、悲しげに肩を落としていた。

明朗は三桜の正体を知らないが、こうなるのも必然だろうと思う。純血一族という勢力の人間である三桜にとつて、結界寮の住人である明朗に周囲をうるつかれてはなにかと面倒だからだ。

かといつて無理矢理突き放せば、怪しまれる。

韜晦はこの並折に於いて常識なのかもしれないが、それを悟られないように生きる用心も必要だ。純血一族なら尚更ね。

常に傲岸不遜かつ余裕綽々を気取る三桜は、意外にも明朗に手を焼いているのかもしれない。

まあ……明朗も明朗で、初対面の際に右ストレートをぶちこまれながらも、へらへらとしているような奴だから。三桜だけに留まらず各所で厄介な存在となつてはいるだろう事も容易に想像できる。

なので頻度は減りつつも彼はやはり、ここへ遊びにやってくるの

だ。
何故だ。

そして三桜の方はというと 今日も定例に変わらず、ロビーのガラス戸と網戸を開けてぼんやりと空を眺めていた。

今日はさほど暑くもなく、むしろ少々冷えるぐらいの気温で、空は曇っている。

彼女にとって眺める空の模様に拘りはないということか。

「まったく。昼間と夜の気温差はなんだ……この分だと、今夜も冷えるぞ」

立ったまま呟き、彼女は一つ息を吐いた。

確かに、夏真っ盛りだというのにやけに夜が冷える。

世界を股にかける死使十三魔に属していた私が、日本の四季を詳しく知るわけでもないが、それでも土地の気候を考えてもこの冷え方は少々気になった。

気が向いたら並折の気象情報を調べてみるか。

そんなことを思いつつ私はいつものように大きめの網椅子に腰を落ち着け、新聞を開いたまま三桜の様子をひそかに窺っていた。

「ん？」

すると三桜の目の前に、一匹の野良猫が現れた。迷い込んだらしい。

「うん、うん。ああ、暑いなあ」

野良猫は、三桜の方へ頭を上げて懸命に鳴き声を出している。それに対して三桜が相槌を打っている。

「なんだ貴様、うちのえとから来たのか？ 随分な遠出だな」

あの三桜が足を折り曲げ、縁側に腰を据えた。

猫は夢中で三桜に声を向ける。

私はこんな人間に対して積極的にコミュニケーションをとろうとする猫は見た事がなかった。まるで世間話が成り立っているように見えた。

三桜は鳴き声に対して表情を変えて応答しているし、猫は三桜の言葉を待つてから大きな鳴き声を繰り返す。

不思議に思う私がおかしいのではないかと錯覚するくらい、自然だ。

「成程、家族を連れてなあ。貴様も大変だな。つちのえとで何かあったのかねえ。何、挨拶？ 貴様達、この林に居を移すの？ ふうん。いやいや別に私様の事を気にする必要はないよ。それはそうと林の奥にさあ、小さいけど滝があるじゃん。見つけた？ そっか、後で行ってみなよ。怪我すんなよ。また顔見せに来いよ」

小動物へ一方的に言語を放った後、ひらひらと軽やかに手を振る三桜。

猫は最後に一度大きく鳴き、庭から出て行った。

……少しだけ三桜が心配になった。

「さて、ずっと開けてると冷気が逃げるからな っ、どわああ

！」

「随分機嫌が良いじゃないの」

私は伸びをする三桜を立ち上げらせず、彼女の肩に顎を寄せ、吐息交じりに囁いてやった。

常に大胆不敵で意気揚々と偉そうな態度を振りまく女が、小動物を相手に会話じみたままごとをし、挙句満足そうにしている。

からかうなら、この好機を逃す手は無い。

「ぎ、柘榴っ？ 居たのか？ いつから？」

「いつからって、ずっとよ」

「そうか、私様に何か用か？」

「何よ。いつもは用なんか無い癖にあたしに絡んでくるあんたが。

あたしは用が無いとあんたに声を掛けちゃいけないわけ」

「いや別に、そういうわけじゃ……」

「それとも、あたしが猫の鳴き声を出さないと、駄目？」

「き、貴様という奴は……」

「野良猫相手に、随分とメルヘンチックなやりとりしてたわね」

「す、数百年と生きた人間は猫語を理解するようになるのだ」

「あんた何歳よ」

「二十三くらい……」

「いろいろとおかしいじゃない。いつもの事だけど」

「最後のは余計だ」

私の顎を肩に乗せたまま、三桜は溜息を吐いた。

……なんだ？ やけにおとなしいじゃないの。

本格的に心配になってきた。

「どうしたのよ三桜らしくない。最近のあんた、一層変よ」

「一層って言うな」

「猫とじゃれていた事を差し引いても、変。毎日外ばっかり眺めて

さ。毒入りの食べ物でも拾って食べたんじゃないの？」

「毒……」

やっぱりおかしい。

また遠い目をしている。

「暑さで頭が……さらに残念なことに」

「貴様のその毒を吐く口はなんとかならんのか」

三桜が人差し指で私の唇を撫でてきたので、おもわず肩が痙攣した。

いきなり何をするんだ気持ち悪い。まさに猫撫で声じゃないか。彼女は飛び退くように離れた私を、これまた色っぽい目で見てくる。迂闊だった。こいつが変態だって事をすっかり忘れていた。

過去に一度、指を舐められるという体験をしていたというのに。学習せずにまた接触した私が悪いのか。

いや、変態が悪い。

怯えて警戒する猫のように、私は三桜と一定の距離を保つ。

果たして彼女の言う毒とはなんなのか。それは三桜の抱える事情であり、はつきり言って私が首を突っ込むべきではない。

学習しろ。私はいつも後悔ばかりしていた筈だ。

そもそも私は他人の事を気にしていられるほど余裕のある立場か？

自問に対する自答は、否だ。私にも探し物があり、探し人がいる。

三桜が誰を待とうが、任務に行き詰まるうが、それは彼女自身の問題であって彼女自身が解決するものだ。私には関係ない。

羽田立荘に居付いてからひと月が経ってしまった。私も進展がない。のんびりと並折の自然に囲まれた生活を満喫している場合じゃない。

「あら？ 三桜ちゃんとクロちゃん、相変わらず仲がいいのね」

ロビーの中に耳触りの良い声色。

三桜を警戒し、自分の怠惰さを反省していたところに、矢神聖歌が現れた。彼女の声は気に入っている。なんだか安心する。

聖歌は羽田立荘の中にいるときは、常にエプロンを着ている。だ

が今は着ていないという事は、外出でもするのだらう。

そういえばこの一ヶ月……炊事も洗濯も、掃除でさえ彼女一人に任せきりだったと気が付き、自己嫌悪の感が加速した。

お嬢様気質の三桜は気にもしていないようで、聖歌へ軽い挨拶の言葉を投げ掛けてから、開けっ放しだったガラス戸を閉めた。

「ん、聖歌。出掛けるのか？」

聖歌のエプロン姿を見慣れていたのは三桜も同じだったらしく、違和感から彼女が外出するのだと悟って言う。

私と三桜が同じ思考をするということは、どちらも似たり寄ったりのぐうたら生活を送っていた証拠だ。猛省の必要あり。

こんな怠惰な女を二人も抱えて、それでも文句ひとつ漏らさない聖歌。名前に劣らぬ女神様が。

「買い物に行つてきますけど、三桜ちゃんは何か要る物や用事ある？」

「私様はないなあ」

「クロちゃんは？」

「あたしもない」

「そう、じゃあ夕飯の支度に間に合うよう帰ってきますから。お留守番、お願いしますね」

三桜は右手を挙げてビシリと敬礼。

私もつられて敬礼。何故だ。

「いつ明朗君が来るかわからないので、鍵は掛けずに行きます。不審な人が訪ねてきても中へ招いちゃ駄目ですよ。危ないと感じたら、すぐに逃げる事」

三桜は左手も挙げて両手で敬礼……つてアホか。そもそも、この三桜より危なくて不審な奴を探せという方が難題だ。

考えてもみる。自称凶悪強盗殺人犯が、この羽田立荘へやってきたとする。正面からでも、裏口からでも、屋根からでもいい。侵入したとする。

どんな成りゆきを思い描いても結末は一つしか思い浮かばない。

純血一族の末裔 守野三桜が、返り血を浴びて笑っている姿だ。両手で敬礼するこのアホな警備員は、最強の変態なのだ。

だから聖歌は安心して外出するといひ。

「じゃあ行つてきますね」

三桜のダブル敬礼には微々とも反応せず聖歌は玄関へと歩いていく。彼女は彼女でなかなかの強者だった。

そんな聖歌の後ろ姿に「待った」と言う警備員。

「傘持ったか？」

「傘？」

「ほら」

三桜が後ろ指でくいくいっと指した先は、先程閉めたロビーのガラス戸。

数拍置いてから ぽつり、ぽつり、と。雨が降り出した。

「すごいわ三桜ちゃん！ どうしてわかったの？」

驚いて手を合わせ、目を丸くする聖歌。

私もさすがに驚いた。

預言者じみた芸を披露した三桜は、得意気に自分の鼻先を指で叩

く。

「ニオイでわかる」

犬がお前は。

聖歌は傘を持って出掛けて行った。玄関の戸が閉まるまで彼女の背を見送った私は、そのまま隣へ視線を移す。

そこには当たり前前のように両手を挙げて敬礼もどきを続ける女の姿。なんで私が、背の高いこいつの醜態を見上げなきゃいかんだ。

「もういいよ警備員さん」

「諸手を挙げて、不審者を歓迎するであります！」

「歓迎するなよ」

両手を挙げて歓迎するのは、少なくともそんな物騒なものではない。

「コホン」と、咳払いした三桜は腕を下ろし、首を左右に倒す。

ボキ、ゴキ。

これが関節の音かと問いたくなるくらい豪快な音だ。

「さて柘榴。貴様にお使いを頼もうじゃないか」

ふざけるな。

もう一度言う。ふざけるな。

お前はつい今しがた聖歌に用事はあるかと尋ねられて首を横に振っただろうが。

「お前は生粋の馬鹿かよ！ 聖歌に頼めばよかったじゃないの！」

「私様は私様だ！ 馬でも鹿でも犬でも猫でもない！」

「なら豚か！ 雌豚か！」

「それは興奮する！」

「貴女という材料。傀儡屋、矢神聖歌が頂戴しましょう」

「並折へ家族旅行に訪れたあの日。私の家族は、先代の傀儡屋によって殺されました。父親は使用不能だと言われて廃棄され、残った母と妹と私、三人分の死体で、矢神聖歌が作られたのです」
「部屋にあったあの写真は……」

「ああ、あんなものまで見ていたのですか。そういった詮索は感心しませんよ、三桜ちゃん。あの写真は、私たち家族の生前最期の写真です。撮影したのは私ですね。妹とは双子でしたから、よく似ていたでしょう？」

「随分長生きだな」

「そうでしょうか？ まだ四十数年ほどしか生きていませんよ。師匠は変わらぬお姿で百年近く生きておられるのではないのでしょうか」

これはこれは。獣人である私様と比較しても遜色ない人外ではないか。いやいやこんな無機的な物と比べるなんて怖気が走る。

三桜は心中嘲笑った。

「矢神聖歌、貴様にはがっかりだ」

聖歌との会話は三桜にとってあまり心地の良いものではない。

べつに人形に対する狂気を帯びた思考と行動が、三桜の心情を左右することなどない。実際彼女は「ああ、いるよねそういう奴」程度にしか思っていない。

だが彼女が獣人であり弱肉強食を信条とする以上、矢神聖歌という存在のある点に対してひどく不快に思い失望するのは当然だろう。

人形は 食べられないのだ。

恣意的な思考をする者の多い守野の人間にとって、そればかりは

レープを持っている。しかも全部同じ味なのだからもはや何も言いたくない。

普段より幸せそうな顔（目を凝らして観察しないとわからない表情変化）で、そこいらの若者と変わらないダラダラ歩きをしていた瑠架子だが、いきなりその歩き方が変化した。

これは容易にわかる変化だ。

膝から下を遊ばせるように振る気の抜けた歩き方から一変。靴の踵と爪先をしっかりと接地させ、股関節から背筋を駆使して素早く歩き始めた。私も合わせて歩行速度を上げる。

一定の間隔で口を付けていたクレープも瑠架子の意識から外れている。

一体何事かと彼女を見ていた私の視線に瑠架子の視線が重なるなり、彼女は小声で言った。

「……問おう柘榴殿。お主が知りたがっているカオナシというものは何でござるか？」

「妖怪」

何だ？ と訊かれても、並折に棲む妖怪としか答えようがないのでそのまま言った。

どうやら瑠架子が足を速めたのは気持ちの高ぶりに起因しているようで、若干強張った面持ちになっている。これも微妙な変化だけだ。

「柘榴殿はカオナシという妖怪を求めて並折へ来た、という解釈でよろしいか。そして並折の図書館にその文献が残っている」

「だから私達は図書館に向かっているんじゃないの。今更なによ」

瑠架子の表情は、青褪めたものになった。これははっきりとわかる変化だ。

